第 26 号（平成15年９月）

讃樹會

第２回関西支部会にて／p24〜

香川医科大学同窓会報

目　　次

1　会長挨拶　　髙橋　則尋先生……２
2　同窓会ニュース　同窓から教授誕生
　香川大学教授　鎌野　　寛先生……３
3　特集１　教授の横顔……５
4　特集２　希少糖プロジェクトについて
　細胞情報生理学　德田　雅明教授……14
5　特集３　カルガリ大学交換留学体験記……21
　５年　杉山　豊……21
　４年　鈴山寛人……22
6　第２回関西支部会……24
　記念講演レポート　平成元年卒　田中あゆみ先生……24
　支部会開催報告　平成８年卒　前田 敏樹先生……25
　一言メッセージ……28
7　平成15年度新入生歓迎会
　２年　芦谷　啓吾……30
8　国試報告……31
9　大学ニュース……32
10　第３回理事会議事録……33
11　第４回理事会議事録……34
12　同窓会会長選挙告示……36
12　ロゴマークの募集……38
13　国外留学助成金の募集と結果……39
14　エアメール短信　平成７年卒　中村　丈洋先生……40
15　寄稿　ネパール国際ボランティア……42
　昭和63年卒　清元　秀泰先生
16　開業医だより……45
　昭和61年卒　篠島　　正先生……45
　平成２年卒　飯田　靖彦先生……47
17　卒業生近況報告……49
　昭和63年卒　古屋富治雄先生……49
　昭和63年卒　町井　康雄先生……51
　平成元年卒　白川　淳子先生……53
　平成４年卒　原　　義明先生……55
　平成８年卒　横井　英人先生……57
　平成８年卒　大谷　真子先生……59
　平成10年卒　稲葉　純子先生……61
　平成10年卒　滝　　正徳先生……63
18　事務局からのお知らせ……65
19　編集後記……66

アカルイミライ（？）

会長
髙橋　則尋
（昭和61年卒）

本年、香川医科大学医学部附属病院が開院20周年を迎えました。私自身、１期生として香川医科大学に入学し、昭和57年11月に附属病院が竣工され、昭和59年、５年生のときにポリクリが始まり、当時、真新しい病棟内を不安と少しの誇らしさの混ざった気持ちで歩いていたのをつい最近のことのように思います。時の過ぎるのは光陰矢のごとし、早いもので20年が経ち、わが大学も少しずつ歴史を刻んでいるといえます。まさに附属病院も成人を迎えるわけですが、今後は10月に香川大学との統合記念式典を控え、来年には独立行政法人化や卒後臨床研修の必須化が始まろうとしています。このような状況を考えますと、新成人を迎える社会は決して順風ではなく、荒海に乗り出すようなものと思われます。

さて、統合後の同窓会は当然ながら香川医科大学医学部医学科同窓会から香川大学医学部医学科同窓会へと変わります。讃樹會の名称は変わりませんが。しかし、同窓会の役割はどのようになるのでしょうか。古くて歴史のある同窓会、特に総合大学における医学部同窓会の活動を参考にしますと、一般的に医学同窓会が他の学部に比し活動が活発で、学部運営への影響力も強いと思われます。我々讃樹會においても将来的にはそのようになると思われますが、未だに過渡期の段階にあります。こうした状況の中で、大学の統合や独立行政法人化を迎えるわけですが、讃樹會としてどのような役割を果たすべきでしょうか。当然ながら積極的にタイムリーな意見を言うべきですが、ひとつにはチェック機能を持った組織であることと思います。そのために大学執行部に対してパイプを持つ必要がありますし、是非教授会や今後設置されるであろう評議員会（あるいは理事会）に同窓生が名を連ねるようにならなければなりません。しかし、そのためには何が必要なのでしょうか。現実には暗中模索というしかありませんが。現在出来ることは会員の皆さんにおいてはそれぞれの立場で着実に成果を上げ、同窓生の存在を認めていただくしかありません。また、同窓会としては同窓会の味方を増やすべく、今まで以上に正当な意見を言い、地道な活動を続けなければいけません。あるいは、香川大学の他学部の同窓会とも協調をすることも必要かもしれません。いずれにせよ、現状のままでは讃樹會の存在意義さえも問われるかもしれません。関係各位の皆様とともに、更なる発展のために努力をしていきたいと思います。

私事ではありますが、７月１日より高松赤十字病院内科副部長に転任しました。長い間、本学第二内科講師として皆様にお世話になりました。新任地では香川医科大学の名に恥じることなく、成果をあげていこうと思いますので、宜しくお願いします。私自身は学外となりますが、従来通り事務局を通じて滞りなく同窓会活動を続けてまいりますので、安心して下さい。

想　い　出

香川大学保健管理センター　教授
鎌野　　寛
（昭和61年卒）

私は1980年４月に三木町の香川医科大学に入学しました。今では想像もつかないかもしれませんが、そのころ広大な敷地に現在の教養棟と解剖実習室のある棟だけが建っていました。そして、その棟の中に授業用教室のみならず図書室、食堂、学生課事務室までもがコンパクトにまとまっていました。そうしているうちに基礎臨床研究棟の建設が始まりました、当時の大学を南西方向から撮影したのが図１の写真です。あれから20年あまりの歳月がたちました。現在、附属病院にはPETをはじめ最新の診療設備の充実、医学部においては希少糖研究をはじめ世界最先端の研究が行われていることに目を見張る思いとともに香川医科大学を卒業したことを喜びに思っております。これからのますますのご発展を心より祈念いたします。

現在、香川大学保健管理センターに勤務し、教育学部の兼任教官として学生さんに授業をしたり、保健体育学の先生とスポーツ医学の共同研究をさせていただいております。保健体育といえば、入学した頃の体育の授業をよく想い出します。当時、体育館や運動場もまだできていませんでしたので、100人あまりの新入生が、現在の体育館西側のアスファルト駐車場で基礎体力を増強するために、かなりハードな体操をやっていたように思います。授業の終わりには大学の敷地の周りや男井間池の周辺をあえぎながらランニングしていました。ランニングの走路の途中の農家では牛が飼育されており、われわれが必死になって走っているのをよそにのどかに啼いていたように記憶しています。学生時代には気がつきませんでしたが、現在、保健体育学をはじめ大学における教育の重要性を今更ながらに感じております。６年間の学生時代、授業、実習をはじめ様々な場面において、お世話になった一般教養、基礎医学、臨床医学の

図１　基礎臨床研究棟の建設風景
建設中の基礎臨床研究棟の北側に一般教養棟を見ることができます。

先生方どうもありがとうございます。

大学を卒業してから香川医科大学第一内科に入局させていただきました。入局してから臨床研修はもちろん、myb遺伝子について基礎研究をさせていただきました。なにも知らない大学院生に基礎・臨床医学の基盤を、一からご指導をしていただいた当時の第一内科教授の入野先生をはじめ第一内科の先生方には心より感謝しております。たいへんありがとうございました。

また、現在、学校保健を本務としていますが、日々の学生さんの健康管理においては同窓の先生方には、言葉では言い尽くせないほど、お世話になり本当にありがとうございます。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

シリーズ"教授の横顔"をはじめるにあたって

学生時代にお教えを頂いた教授の多くはもう退官され、各教室には２代、３代目の教授が活躍されていらっしゃいます。そこで、今、香川医科大学を支えて頂いている新進気鋭の教授をお招きして、ご自身の医局に対する思い、大学に対しての思いや未来像などについてお話を伺い、同窓会の今後進むべき道を模索していきたいと思います。また、誠に僭越ながら、対談の末尾に私の勝手な感想をコラムとして書かせて頂きました。普段身近に接することない学生諸氏や他の医局に属する同窓生に対して、対談に協力していただいた教授の人となりや、お考え等を少しでもお伝えできれば、この企画をするものにとって望外の幸せであります。

お忙しい中、ご協力頂きました先生方にはこの紙面をお借りして御礼を申し上げたいと思います。

名誉会長
濱本龍七郎
（S61年卒）

---

1. 第二内科学　河野雅和教授

１月15日pm７時より　於；第二内科教授室
出席者：河野教授、濱本名誉会長、髙橋会長

濱本「今日はお忙しいところ、同窓会の懇談会、“教授の横顔”にご出席頂き有難うございます。河野教授には第二内科教授として研究・臨床・教育を中心にご活躍中ですが、今後の大学のあり方等についてご意見をお伺いしたいと思います。よろしくお願い致します。」

河野「判りました。よろしくお願い致します。」

濱本「それでは、まずは研究についてはどうお考えですか。」

河野「そうですね。私個人として研究はインパクトファクターを重視したいと思います。インパクトファクター重視という事はより多くの研究者に私どもの成果を評価していただきたいという主旨です。香川医科大学より世界に研究成果を発信したいと思っております。」

濱本「それでは臨床講座の長として、臨床についてはどうお考えですか。」

河野「臨床については、今後は臓器別臨床を究めて進めていくべきだと思います。特に第二内科は循環器内科、腎臓内科など重要な診療科として新大学に貢献できると考えています。」

濱本「それでは医局運営についてはどう思われますか？」

河野「私は、医局とは『いろいろな個性の集まった集団』となることが必要だと考えています。それぞれ目標を

はっきりさせ、公正な評価をしてゆきたいと考えています。」

濱本「なるほど…。『個性的な集団』ですか。没個性の時代といわれる現代では、限りない可能性をもった医局員の将来を潰さないように見守ることも必要であるという事ですか。」

河野「そうです。基本的には、多様な価値観を認めるという事も必要になってくると考えられます。」

濱本「教育に対するお考えはいかがでしょうか？」

河野「基本的には人を育てるわけですから、医局運営と同じですね。教育ではそれ以外に、自主性を育む事です。まず、やろう！という気概ですよ。チュートリアル教育もその一環です。」

濱本「これからチュートリアルで育った卒業生の活躍が期待されますね。それでは、最後に今後の同窓会についての先生のお考えをお聞かせ下さい」

河野「私の出身である大阪市立大学同窓会は大変絆が強く、臨床の教授はほとんどが母校出身です。香川医大も20年が経ちましたから、みんなで力を合わせて新たな歴史を作っていくべきです。香川医大の卒業生には特に頑張っていただきたく思っています。」

髙橋「有難うございます。河野教授のご期待にそえるよう頑張っていきたいと思います。本日は有意義なお時間を有難うございました。」

次々と話が進み、約二時間、雑談を交えて河野教授の個人的見解をお聞かせ頂きました。

コラム：セブンドラゴンの「教授の横顔」

第二内科の教授に就任されて早４年。研究意欲に燃える表裏のない、率直なお人柄でした。医療・研究・教育・趣味・人事等、多岐にわたる話題が次から次へと出てきました。特に香川医大の将来は他大学の先生ではなく香川医大の卒業生が中心となって考えてゆくべきであると、また、香川医大の卒業生が診療科の教授、助教授として活躍できる時代が早くくるように希望しているとの意見が非常に印象的でした。

同窓会名誉会長　濱本龍七郎（S61年卒）

2. 第三内科学　栗山茂樹教授

２月18日pm１時より２時まで　於；管理棟３階応接室
出席者：栗山教授、濱本名誉会長、髙橋会長

濱本「今日はお忙しいところ、同窓会の懇談会“教授の横顔”にご出席頂き有難うございます。栗山先生は第３内科の教授としてご活躍されておりますが、先生に大学や同窓会のあり方などご意見をお伺いして同窓会の今後の活動についての参考にさせて頂きたいと思います。よろしくお願い致します。」

栗山「こちらこそ、よろしくお願い致します。」

濱本「まず、香川医科大学に対してはどう考えておられますか。」

栗山「赴任してそれほど経っているわけで

はないのですが、まず大学というよりも、自分の医局の進歩・発展を第一に考えています。それがひいては自ずと大学の大きな発展に繋がるものと信じているからです。」

髙橋「なるほど。それでは同窓会についてはどうでしょうか？」

栗山「私は奈良医大の出身ですから、ここの同窓会とは少し違うかもしれませんが、奈良医大の同窓会は大学の執行部と開業している卒業生の会のようなもので、基本的には大学に対する影響力も少ないですね。勿論、大学運営では車の両輪とは考えていません。」

濱本「大学の執行部と開業している卒業生の会ですか。香川医大の同窓会とは少し違うようですね。ところで、先生からみた香川医大の卒業生はどうですか？」

栗山「そうですね、どちらかと言えば香川医大の卒業生は仲間意識が希薄ではないでしょうか。独自で行動しようとする傾向があるように見えます。それは、関連病院で仲間として育っていってないことに原因があるのではないかと思います。性格面では真面目で思慮深くて良いのですが、どうも行動力に欠ける面がありますね。」

濱本「確かに関連病院での仲間としての繋がりはないように思えます。もう少し、専門を超えた縦横の繋がりを持てるようにするのが同窓会としても今後の課題ですね」

栗山「医局を超えた香川医大のいい関連病院を整備しなくてはいけないんでしょうね。」

髙橋「ところで研究についてはどう考えていらっしゃいますか？」

栗山「研究は自己満足と言われようとも趣味のようなもので、好きということが始まりです。最初から何か世の中の役に立ち、何人もの人を救えるからとは考えていません。最終的にそうなればいいんです。自分は臨床家の発想しか出来ないのだから、むしろ臨床とは頭を切り替えて、違う発想、違う方向性を求めていきたいと考えています。」

濱本「それでは、今後の大学のあり方についてお伺いします。」

栗山「新設医科大学特有の『臨床家だけを育てたらよい』という方向には、大きな危機感を持っています。その為には頑張って、研究で評価を受けなければならないと考えています。古い大学は少数の人間が決定権を持っていますが、香川医大はリベラルで誰でも平等に発言権を持っているので、今後の大学のあり方もいろんな意見を反映させて進むべき道を見極めていけばよいと思います。」

髙橋「貴重なご意見を有難うございました。同窓会の今後に参考にさせて頂きたいと思います。」

コラム：セブンドラゴンの「教授の横顔」

真面目でしっかりした堅実家という第一印象。頭の回転が速く、鋭くどんな質問にも的確に回答され、物事を何でも一つ一つ、真面目に対処される正統派教授。若くして教授になられただけに満ち溢れる自信が感じられました。今後、何度か多方面にわたって話を伺いたいと思いました。医師として、研究者としての原点を感じさせて頂きました。

同窓会名誉会長　濱本龍七郎（S61年卒）

3. 第二外科学　横見瀬裕保教授

３月28日pm１時より２時まで　於；管理棟３階応接室
出席者：横見瀬教授、濱本名誉会長、髙橋会長

濱本「今日は緊急手術が入って、お忙しいところ、同窓会の懇談会“教授の横顔”にお時間を頂戴し、申し訳ありません。横見瀬先生に研究・臨床・教育などについてご意見をお伺いして、今後の同窓会活動の参考にさせて頂きたいと思います。よろしくお願い致します。」

横見瀬「こちらこそ、よろしくお願い致します。」

濱本「それではまず、大学のあり方についてお伺いします。」

横見瀬「私の考え方として、基本的に大学の方向性は学長が決めることで、自分の出来る事は出来る範囲で一生懸命努力して、本学の卒業生を立派に成長させたい。大学の方向性とかを考えるより、まずそうでありたいと思います。自分は新任教授として、教室の充実、成長に懸命に取り組み、今、正に産みの苦しみの中ですが、幸い教室員が大変よくやってくれているので楽しみでもあります。」

髙橋「つまり、教室運営が基本ですね。それでは、次の段階。今後の抱負はどうですか？」

横見瀬「自分の希望は将来的に、讃岐の丘から世界に情報を発信できるように努力をしていきたいと思います。大学運営自体は色々な成分を注入してバランスが取れている方が良いと考えます。」

濱本「なるほど。横見瀬教授の抱負は今進行しつつあるようですね。」

横見瀬「そうです。優秀な教授を輩出し、学問的に大学の発展をリードしていかなければなりません。日々努力ですね。まずは第二外科を発展させ、今後更に大学に大いに貢献したいと思っています。」

髙橋「本日は緊急手術というお忙しい中、足を運んで頂き本当に有難うございました。」

コラム：セブンドラゴンの「教授の横顔」

歯切れよく、自分の意見をはっきり述べられる大変明快なお人柄でした。先生の基本理念は非常に判り易いものと感じました。周囲に動かされること無く、知ったか振りや背伸びもしない。常に努力・精進を怠らない王道を歩む教授に見えました。香川医大の卒業生に対しては非常に温かい目で見守って下さっており、並々ならぬ意欲を感じました。次々と色々な話が弾み、大変楽しいひと時を過ごせました。

同窓会名誉会長　濱本龍七郎（S61年卒）

4. 眼科学　白神史雄教授

４月24日pm１時より２時まで　於；研究棟３階会議室
出席者：白神教授、濱本名誉会長、髙橋会長

濱本「今日はお忙しいところ、同窓会の懇談会“教授の横顔”にご出席頂き有難うございます。教授就任から丸１年。眼科教授としてご多忙な中、白神先生に今後の大学、卒後研修問題などについてご意見をお伺いして、同窓会の今後の活動についての参考にさせて頂きたいと思います。よろしくお願い致します。」

白神「よろしくお願い致します。」

濱本「それではまず、一年経ちましたが、教授としての抱負はいかがでしょうか。」

白神「第一に眼科は人が少ないので、もっと新しい人を育てて、新しい教室作りをしたいですね。」

髙橋「新しい教室作りですか？」

白神「そうです。新しい技術を取り入れ、自分がやりたいことをやる為の教室作りです。例えば、学閥で人を選ぶのでなくて、人物重視でいい人を取りたいと思います。それと大学には入学時に香川県人を多く取れと言いたいですね。」

濱本「そうですね。卒業後のことを考えると香川県人を多く取ることは重要なことですね。それでは大学についてはどうお考えですか。」

白神「大学は大学病院で行う医療をすべきで、臨床の高度先進医療をどんどん進めるべきだと思います。そして、具体的に香川医大が今後生き残れる道を模索する必要があると思っています。実際、私自身、教室運営が忙しくて、大学全体の事は考えていられないのが現状です。私は会議や委員会が少々苦手で、もし時間があれば研究や臨床に当てたいと思ってしまいます。」

髙橋「研究面においてはどうですか？」

白神「研究については、残念ながら旧帝大などに比べるとどうしても資金・人手などの理由で勝てないというのが実状ですね。地方においての基礎研究は隙間産業のようなものだと思います。」

濱本「なるほど…隙間産業ですか。現実を直視すればそうなるということですか。」

白神「それは現実です。将来はどうなるか分かりませんが…。」

濱本「最後に先生のご趣味、楽しみは何でしょうか？」

白神「ジャズピアノです。」

濱本「ジャズピアノですか！いいですね。ところで、お酒は召し上がりますか?」

白神「残念ながら下戸です。」（一同笑い）

髙橋「本日は有難うございました。」

コラム：セブンドラゴンの「教授の横顔」

ピアノが上手でダンディーな、新進気鋭の若手教授。考え方は真っ正直で一直線といった印象です。ご自身の専門に対して並々ならぬ意欲を持たれており、新世代の教授を中心に香川医大の眼科はどんどん進歩するであろうと確信しました。現在はご自分の教室運営にしか興味を持たれていないようですが、大学全体にも新しい風を吹き込んで欲しいと思いました。私が対談を始めて、白神教授もフランクで何でもご相談できる教授のお一人だと思いました。

同窓会名誉会長　濱本龍七郎（S61年卒）

5. 第一内科学　石田俊彦教授

５月28日pm12時45分より１時30分まで　於；管理棟３階応接室
出席者：石田教授、濱本名誉会長、髙橋会長

濱本「今日はお忙しいところ、同窓会の懇談会“教授の横顔”にご出席頂き有難うございます。第一内科の教授としてだけでなく、大学の卒後教育の中心的役割を担っておられる石田教授に卒後教育や医局運営などについてお話をお聞かせ頂きたいと思います。よろしくお願い致します。」

石田「判りました。よろしくお願い致します。」

濱本「それでは、まずは多くの同窓が不安に思っています卒後教育についてお伺いします。」

石田「新医師臨床研修制度に基づく卒後臨床研修の２年というのは、言い換えれば学生生活が８年続くのと同じになりかねないと思います。従って、大学独自のシステムを作って、それを大学の特徴として前面に押し出すべきですね。卒後臨床研修の２年間に、医師としての人格を涵養し、全人的診療能力を修得していただきたい。この卒後臨床研修を成功させるのは、教える側の熱意と努力はいうまでもなく、研修医自身の熱意と努力も必要です。しかしながら、指導者の側に教えるのが好きな人がそれほど多くはいないというのが現実ですね。皆さんにもっと教育者としての認識を持ってもらいたいものです。また、研修評価の仕方にも色々と問題があって難しいですね。私としては自己評価が最も良いと思っていますが…。」

髙橋「それでは医局制度についてはどうですか？」

石田「人事に関する医局の役割を早くなくして、人事は大学と病院がやれば良いと考えています。研修医はもとより全てのスタッフを公募にして、良い意味での競争原理を働かせたほうがもっと活性化するのではないでしょうか。また、外からのオファーがあれば病院として考えるべきで、一人か二人に個別に何処何処に行くようにというのは不公平だと考えています。」

濱本「画期的な意見ですね。医局制度を廃止するとなると、人事的なことを大学に任せるとなると思いますが、そうなると病院長の役割が重要で、人事に対する責任が大きくなりますね。」

石田「そうです。病院長がしっかりと将来を見据えて人事等を考えていかなければならないし、本当に病院のことを考えるのなら全ての既得権を捨てる覚悟がないと改革はできないと思います。そういった意味からも内部から病院長を選出するのも如何なものかとも考えます。病院長立候補の際には所信表明など将来に対するビジョンを伝えるべきだと思います。」

髙橋「なるほど…。それでは最後に先生の理念をお聞かせ下さい。」

石田「平等という名の不平等がまかり通っていますが、自分は本当の意味での平等を遂行してきたいと思います。

大学人はどうしても視野が狭くなりがちですが、いろんな面に目を向け、大きな視野のもと、今後も研究・臨床・教育に当たっていきたいと考えています。」

濱本「本日は普段お伺いできないようなお話を伺えてとても有意義な時間でした。有難うございました。」

コラム：セブンドラゴンの「教授の横顔」

私は第一内科で石田先生が講師時代から20年近く傍で存じ上げてきましたが、臨床家、研究家、教育者として思想家的発想がよく飛び出し、周りは時々理解に苦しまれるようですが、私は理解でき常に敬愛しています。患者を愛し、臨床がこよなく好きで、医者という職業に最もふさわしいお人柄です。意外ときついことも仰いますが、あまり人に嫌われない人徳を持っておられます。正統派教授であり、自分の意見をしっかり持たれている石田教授は、取っ付きは悪いのですが、会話が進んでいけば段々楽しくなります。大変な時期とは思いますが、今後とも大学運営の為に頑張ってください。

同窓会名誉会長　濱本龍七郎（Ｓ61年卒）

6. 細胞情報生理学　徳田雅明教授

４月22日pm１時から２時30分　於；管理棟３Ｆ会議室
出席者：徳田教授、濱本名誉会長、髙橋会長、清元編集委員長

清元「今日はお忙しいところ、同窓会の懇談会“教授の横顔”に参加していただきありがとうございます。今日は徳田教授に来ていただき、香川医大の現状と将来と言うテーマで懇談してもらおうと思います。先生は非常に研究、教育の分野でアクティブに仕事をされており、今回この懇談会に登場して頂きました。よろしくお願いします。」

徳田「こちらこそ、よろしくお願いします。」

清元「まず、研究面では希少糖プロジェクトだと思います。衆目の集まる大きなプロジェクトで大学の未来がかかっていると言っても過言ではありませんね。また、教育では学生に非常に人気のあるカルガリ大学との交換留学では、本年度より単位の互換を行うと言う画期的なプロジェクトの中心人物として活躍されています。まさに大学のポリシーである世界に向けて情報を発信するという点で、徳田先生は非常に大きな貢献をしていただき、われわれ同窓としては香川医大がここまで成長したかという感慨で、誇りに思っています。今日は、先生の忌憚ないご意見を承り、われわれ同窓の進むべき道についてご教授願えたらと思います。」

濱本「まず、はじめに先生の一番大事にされていることは何でしょうか。」

徳田「人を育てることです。人材を大事に育成することではないかと常に思っています。」

濱本「医局においても、大学においてもですか？」

徳田「そうですね。まず、医局員を大切に育てることが必要で、それができていなければ、大学の全体の仕事は出来ません。まず、家庭を大事にしない人は成功しないと思います。それ

で、ようやく外の仕事もできる。それと同様に僕にとっては医学教育を通じて学生を育成することも、希少糖プロジェクトでの産官学共同事業も大学にとって必要だと思って精一杯がんばっていますが、医局での基本的な研究も非常に大切だと認識しています。」

濱本「なるほど、家庭があって仕事ができると言うことですね。それでは、率直に先生が思われている香川医大の現状と未来はどうでしょうか。」

徳田「小粒なイメージがありますね。特に、若くして守りに入ってしまっている人も多いですね。学生も君たちの頃はもっとアクティブ、悪く言えば破天荒なところがあったね。教官でも、そういう風におとなしくなってイエス・マン的な発言が増えたように感じる。あるいは、自分自身も責任ある立場になり同じように変わってきたからかもしれないですが・・・・。」

清元「学生はおとなしくなりましたが、それは全国的な傾向もあるのではないでしょうか。しかし、先生が腎臓集中講義に紹介してくださるカルガリ大学への派遣学生は、皆とてもアクティブでしたよ。僕のイメージでは女性が昔に比べると格段に強くなったというイメージがありますが・・・。」

徳田「それはとてもいいことだと思いますよ。本学でも入学の段階から女性が多いわけですから。しかし、卒業してからそのモチベーションが続かないんですよね。これは託児所などのインフラの整備が非常に遅れていることと関係あるかもしれませんね。香川医大で研修する人を増やしていくためには是非とも必要でしょう。その点では君たち同窓会にもっとがんばってもらわないと。」

清元「先生からそういうご意見をいただくと本当に嬉しいです。僕らも女性研修医のために24時間託児所を作ってもらおうと思うのですが、大学は腰が重くて・・・。でも、そういう施設は看護師さんにも必要ですし、実は僕も子供が小さい時、男手で子供の面倒観ていたのですが、ほんとにストレス・フルで仕事との両立が難しかったわけです。だから、決して小さな問題ではありません。医局でも子供のために時間が取れる職場に変えてほしいと言う男性の医者もいます。でも大学ができないなら、同窓会が作るべきか、とも考えているんですよ。」

徳田「応援しますよ。僕のポリシーは人を大切に育てるということですから。」

濱本「さて、先生の立ち上げられた希少糖プロジェクトは今、うちの目玉になっていますね。先日も香川大学の農学部の教授が県知事賞を取りましたね。」

徳田「そうですね、何森教授ですね。この事業は産官学の連携プロジェクトで、大学だけでなく香川県にとっても非常に重要なプロジェクトであり、実用化に向けて研究面の成果をあげ、実証していかねばなりません。そのためにはつまらない縄張り意識をなくしていかねばなりませんし、更に自戒の意味を込めて言うなら、もっと大局を、そして５～10年先を見つめる目が必要ですね。」

髙橋「つまり、これからは香川医大が一丸となって、補いあい助け合う関係を築いていくということですか？」

徳田「そうです。今は教授陣に一人も香川医大出身者がいませんが、いずれまたそういう指導的な人物も出てくる

でしょう。私は開学以来香川医大に勤めて、君たちと同じような気持ちでこの大学を盛り上げようとしてきました。そこには専門や出身大学など関係ないのです。ですから、早くそういう大局に立ち、医局や講座を越え本当に大学を挙げた体制になればと思っている次第です。」

髙橋「そのためには、どのような方向性で（同窓会が）進んでいくべきだと思われますか？」

徳田「今回のような希少糖プロジェクトのような共同で進めるものには、若い皆さんが興味を持ってどんどん参加して欲しいですし、医学教育でも、教育なんて自分のためには何のメリットもないと言わずに、10年先の人材を育てるのが大切だと理解して参加してほしい。そうして良い医師を育て良い研究をし良い情報を外に向けて発信することではないでしょうか。」

清元「ありがとうございます。それでは、先生、良ければ次の会報に是非寄稿してくださいよ。おそらく、若い研究者や医学部の学生たちも喜ぶと思います。」

徳田「わかりました。それでは、原稿を送りますから。」

髙橋「それでは、先生。本日はどうもお忙しいところありがとうございました。今後の香川医科大学の発展のためにも、よろしくお願いいたします。」

以上、同窓会会長、名誉会長との懇談は雑談を交えて和やかに終了しました。

コラム：セブンドラゴンの「教授の横顔」

実は、徳田教授と会ってみるまでどんな人なのか、学生時代の若々しい徳田先生しか知らない我々には未知数でした。しかし、助手の時より長く香川医大で苦労されているだけに、本学の歴史、経験に基づく発言が多かった。非常に謙虚でありながら、芯の強い方でした。対談で最も印象的であったのは、学生を一番に考えておられるという事です。大学の運営についても熟慮されており、医局（教室）運営も真剣で大変情熱的でした。こういう教授の下で４年間の研究生活を送れば、素晴らしい一生の、そして人生の糧になる事でしょう。幅広い人間性を身につけ、時にはウイットを交えながら突っ込んだ会話もできる。まさに、父親のような、大人の教授という印象です。私が言うのも何ですが、若き助手時代から一回りも二回りも大きくなられたという感じです。今後のご活躍を期待しています。

同窓会名誉会長　濱本龍七郎（S61年卒）

希少糖研究の現状

細胞情報生理学　教授
徳田　雅明

１）はじめに

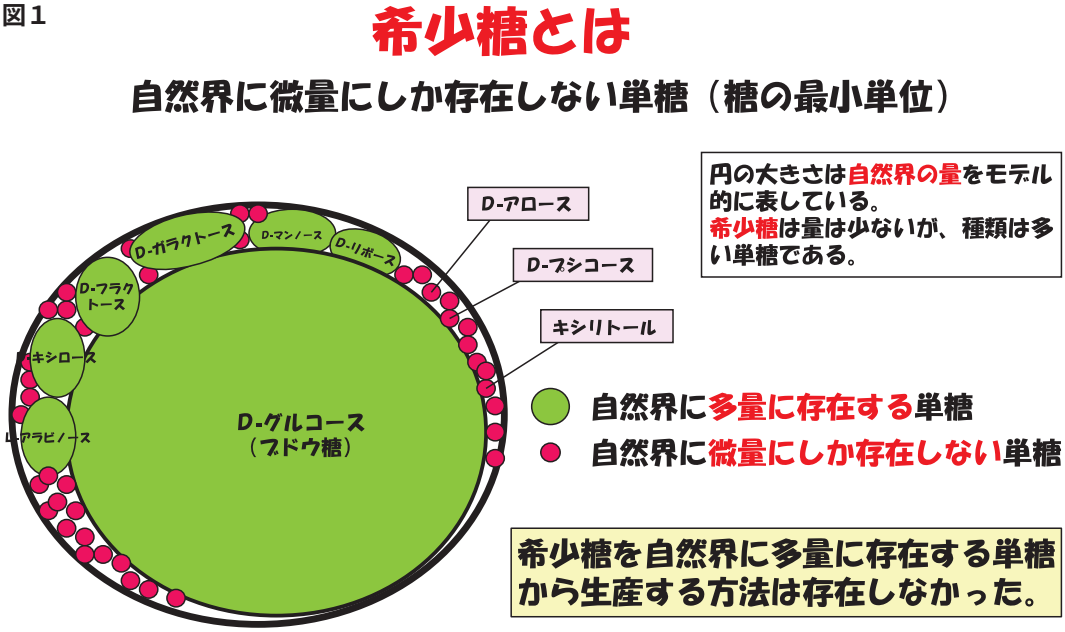
香川医科大学では香川大学と協力しながら、香川県下を中心とする研究機関や企業と連携しながら希少糖研究を推進しています。

希少糖は図１に示すように、自然界に微量にしか存在しない単糖（糖の機能的最小単位）と定義付けられます。一番大きな円全体を単糖全体とすると、大き目の緑色の円で示しているのが自然界に多量に存在する単糖（ブドウ糖、果糖など７種類）です。小さな赤色の円が希少糖を示し、その種類は約50種類あります。これらの希少糖のほとんどのものは市販されていないか、大変高価であるため、研究はほとんど進んでいませんでした。

このような希少糖を自然界に多量に存在する単糖から生産し、その機能を解明しその成果を事業化に連結するプロジェクトです。

通常低分子の有機物は高分子の有機物の構成成分となり、機能（生理活性）を持たないと考えられていました。単糖は、エネルギー源となるか甘みの源になることは知られていても、それ以上の働きはないという思い込みがありました。我々はこのような思い込みを打破する研究を展開し成果を得ています。

図１



２）希少糖の生産

希少糖プロジェクトは、まず希少糖を作ることから始まります。その生産戦略を保証しているのは、Izumoringイズモリングと呼んでいる、全単糖の構造化です（図２）。基幹酵素DTE（D-タガトース３-エピメラーゼ）（太い緑線で示す酵素）は、自然界に多量に存在するD-フラクトース（果糖）を希少糖D-プシコースに変換します。さらにDTEは全８種類のケトース（青色の円）にも働くので全単糖が酵素反応で連結され、構造化が完成しました。

イズモリングの意義は、①全単糖の分子構造が構造的に整理できる、②研究の効率的アプローチが可能、③最適な生産経路の設計が可能、④欠落している部分について予見が可能、など大きいものがあります。我々はイズモリングにより全ての希少糖を順次合成しています。図３に示すD-プシコースの生産工程は３段階に大別されます。第一は酵素DTEを微生物により生産・精製しバイオリアクターを作るステップ。第二はバイオリアクターの酵素反応によりD-プシコースに変換するステップ。第三はD-プシコースを精製するステップです。活性の高い酵素を安定的に産生し、バイオリアクターの酵素活性を長期間維持する方法の開発にも成功しました。連続的にD-プシコースを分離する擬似移動クロマト法の分離条件も確立でき、年間100kg以上の生産ラインが確立できました。D-プシコースは、用途開発目的への使用とともに、多くの希少糖の生産の開始物質として重要です。D-プシコースの生産での成果は、D-アロースをはじめ他の希少糖の生産のプロトタイプとして活用できるものです。このように多くの希少糖の生産は、実験室レベルからセミプラントレベルにおいて可能となってきています。

図２

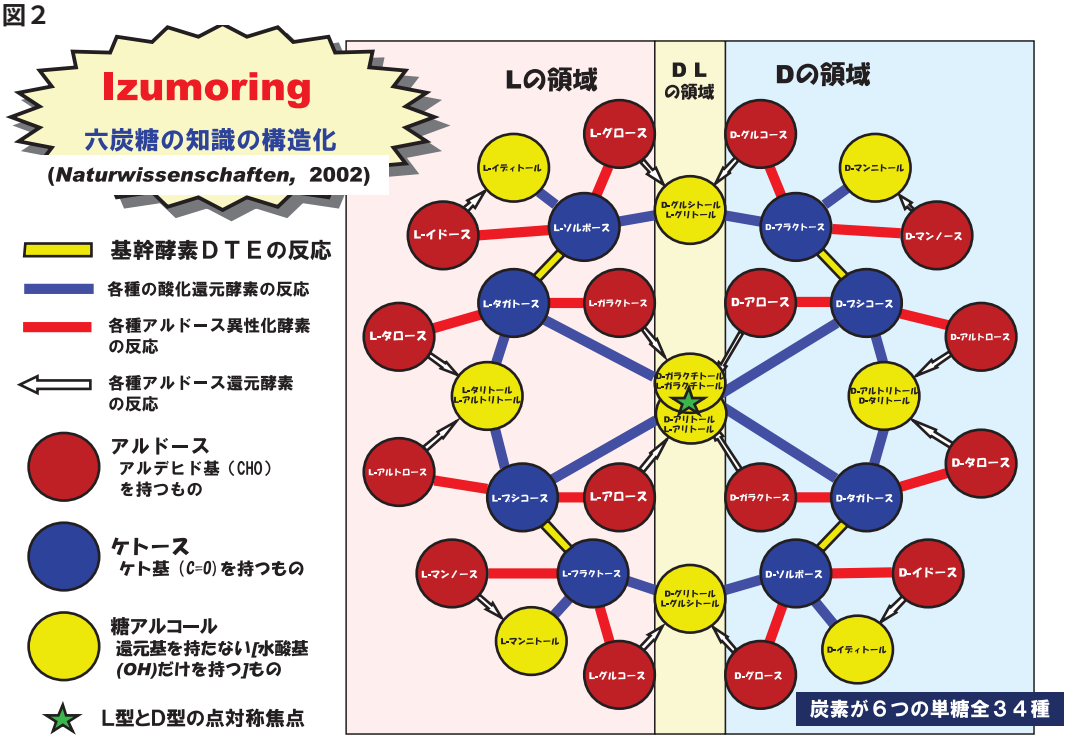
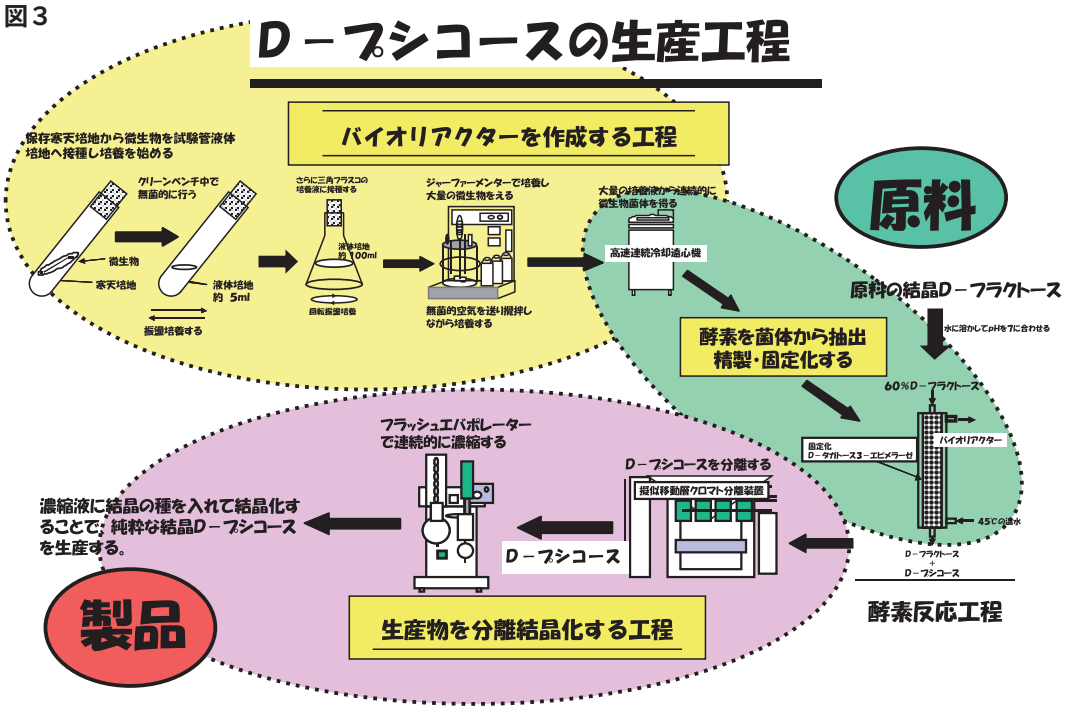


図３



３）希少糖の応用

⑴　D-アロースの生理活性

最近の研究により希少糖に生理活性が存在することが判明してきました。まず図４に示すように、D-アロースには活性酸素（ROS：radical oxygen spieces）の産生を濃度依存性に抑制する作用があることが判明しました。この作用は他の糖には認められませんでした。活性酸素が関与する病態は多く、この作用は幅広い応用性を期待させるものです。

例えばその一つの例を図５に示します。D-アロースには虚血（血流量が低下した状態）により生じるダメージから臓器を保護する働きがあります。特に虚血に弱い神経細胞は５分間の虚血で障害され死んでしまいますが、D-アロースの虚血前注射で、神経細胞死が大幅に減少しました。同様の作用は、肝臓、心臓などでも見られています。

このほかD-アロースには抗癌作用（癌細胞増殖抑制作用）も認められました。癌細胞は適切な培養環境で急速に増殖しますが、D-アロースの添加で増殖が明らかに抑えられました。一方D-プシコースでは増殖抑制作用はほとんどありませんでした。目下、抗癌作用のメカニズムや他の抗癌剤との併用での効果などを検討しています。

⑵　D-プシコースの生理活性

図６には、D-プシコースが、ラットの膵臓β細胞（インシュリンを分泌する細胞）からのインシュリン分泌を促進するという実験結果を示しています。左図のD-グルコースによるインシュリン分泌と同様の反応が、D-プシコースにより起こることを示しています（中図）。右図は、D-グルコースとD-プシコースの相加的分泌を示しています。従って、D-グルコースで分泌するメカニズムとD-プシコースにより分泌する

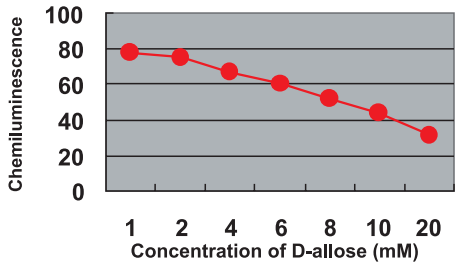
図４

Effect of rare sugars on oxygen-radical production

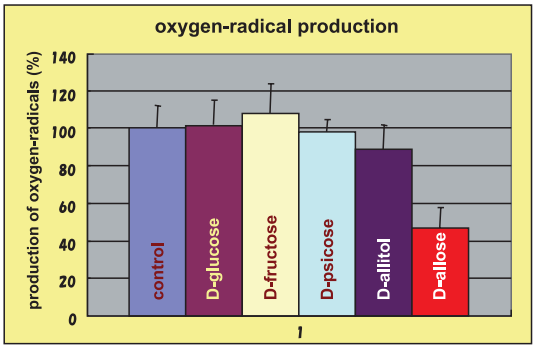
Sugars at 10mM were added 30 min prior to neutrophilsstimulation by zymosan.

Only D-Allose significantly inhibited production of oxygen-radicals from neutrophils

Dose-dependent inhibition of D-alloseon oxygen-radical production



Department of Physiology



The inhibitory effect of D-Allose on oxygen-radicals (hypochlorites, hydroxyradicals etc.) production was dose-dependent.

図５

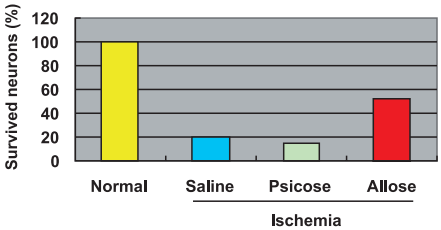
D-allose protects the ischemia/reperfusion injury of the brain

Transient forebrain ischemia was induced in Mongolian gerbils (body weight 60-70g) by a 5 min bilateral common carotid artery occlusion.

D-Allose or D-Psicose (200mg/kg body weight) were injected intravenously 5min before ischemia.

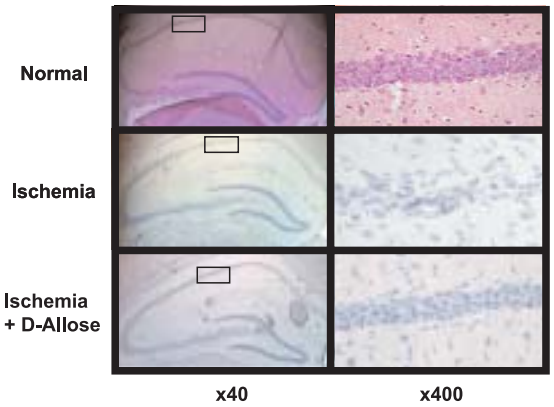
1-2week later, degree of the delayed neuronal death of pyramidal cells in CA1 region of the hippocampus was examined.

Protection of neurons after global ishcemia



Department of Biology

Hippocampus (HE staining)

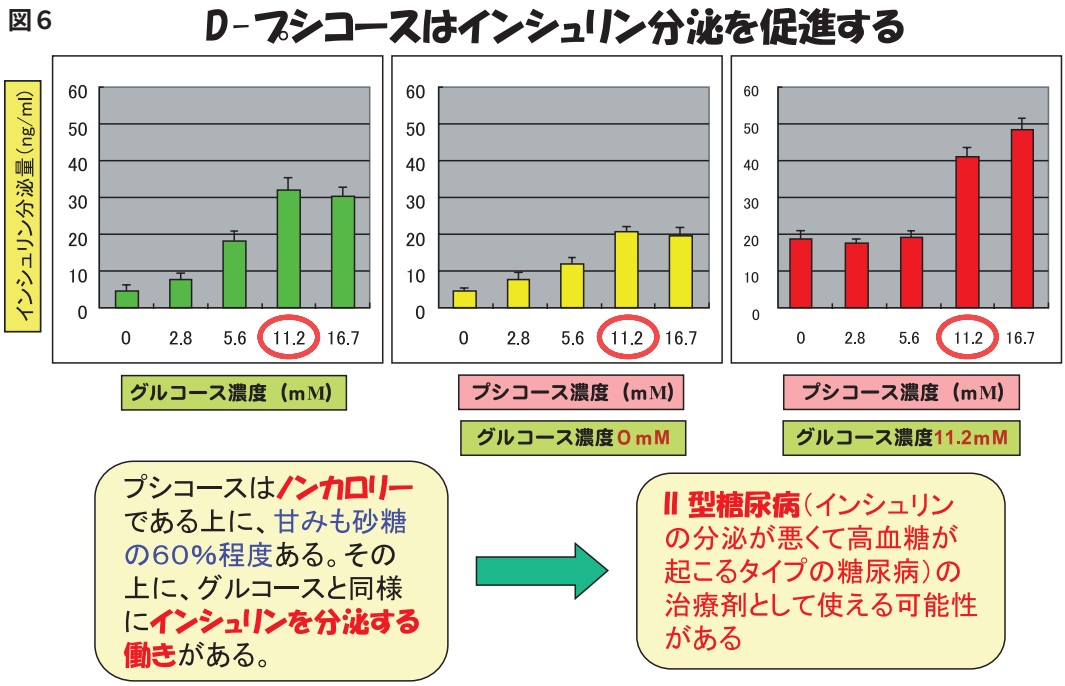


Pretreatment of D-Allose effectively protected neuronal cells of CA1 region of hippocampus from delayed neuronal death after transient forebrain ischemia, while D-Psicose did not.

メカニズムが異なるものと考えています。この効果は、インシュリン依存性の糖尿病への治療の可能性を示しており、最近の研究でラットを用いた動物実験においても、D-プシコースの血糖降下作用が認められ、その有効性が示されました。

また、D-プシコースが動脈硬化の開始因子であるMCP-１（**m**onocyte **c**hemo-attractant **p**rotein-**1**）の血管内皮細胞からの分泌を抑制することも示されました。MCP-1は動脈硬化発症の初期において働く因子です。D-プシコースにはこの他に、肝臓での脂肪の合成を抑制する効果があることも判明し、その結果として血中の脂質を低下させます。これらの効果を合わせると、動脈硬化を防止する医薬品あるいは機能性食品としての応用が考えられ、現在その方向性を持って研究を展開しています。

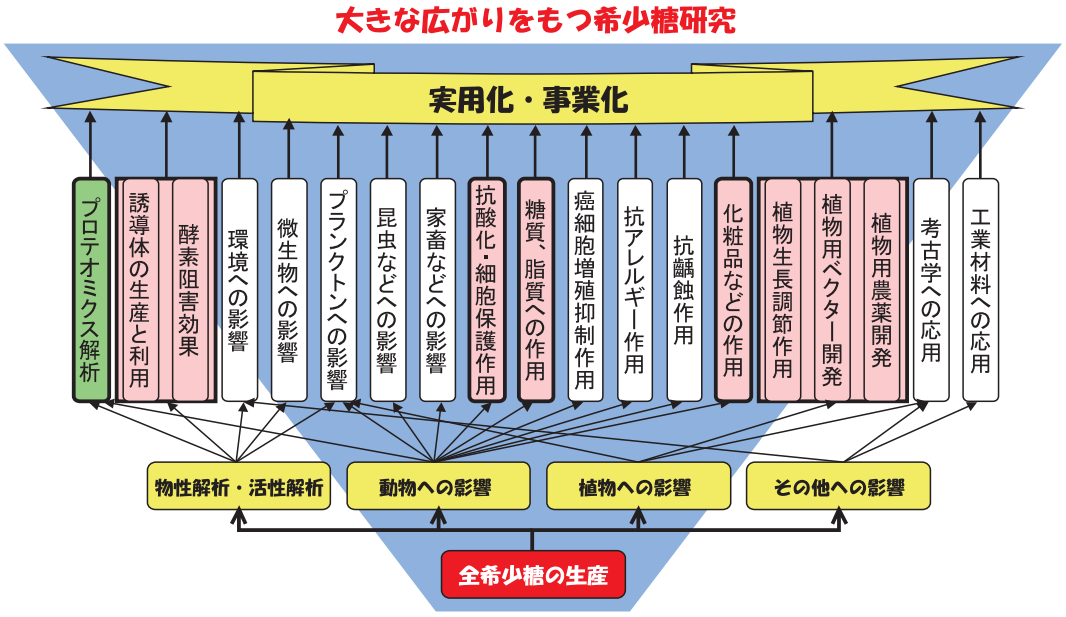
図６



４）希少糖の他の用途への応用と事業化

現在の希少糖研究をまとめたものが図７です。まず希少糖の生産が核となります。その上で分子レベル或いは細胞レベルの研究がなされ、さらにそれが基礎になり、人間を含む動物の世界と植物の世界の両方で希少糖の働きを調べています。また小さなさまざまな丸印で示してあるように、香川医科大学・香川大学のほか、公設研究施設、企業など12機関の共同研究でも協力して研究を行っています。希少糖の最大の特徴は、幅広い応用性にあります。医薬品・機能性食品・化粧品など人体への応用のみならず、他の動物、昆虫、微生物などへの応用、さらには植物への応用のほか、工業材料としての応用も可能です。実用化・事業化にかかる時間は、何を目指すかにより大きく異なります。希少糖の種類別、また用途別に事業化戦略を立てながら進めています。

図７



５）希少糖研究体制

現在香川においては希少糖研究を支える３つのクラスターが存在します(図８)。文部科学省の知的クラスター創成事業（平成14年度より５年間)、経済産業省の産業クラスター地域新生コンソーシアム事業（平成14年度から２年間）とともに、香川県の進める糖質バイオクラスター構想があります。また産業クラスターと知的クラスターの連携においては、生産された希少糖の共有や、情報の交換を行い、成果や特許の共有も行っています。両クラスターは戦略委員会においてその方向性を確認し連携体制を強化しています。

香川医科大学と香川大学においては、全学部がそれぞれ特徴を生かした貢献のできる体制の構築を進めています。特に香川医科大学には100名に及ぶ研究者がこの研究に参画しています。平成14年５月にはその活動を補助するために学内措置として「希少糖応用研究センター」が設置されました。

香川地域の希少糖研究は、世界を見ても他に追随を見ない研究であり、希少糖研究の拠点としての優位性を有しています。本地域の希少糖研究の目標は以下のスローガンに集約されます。

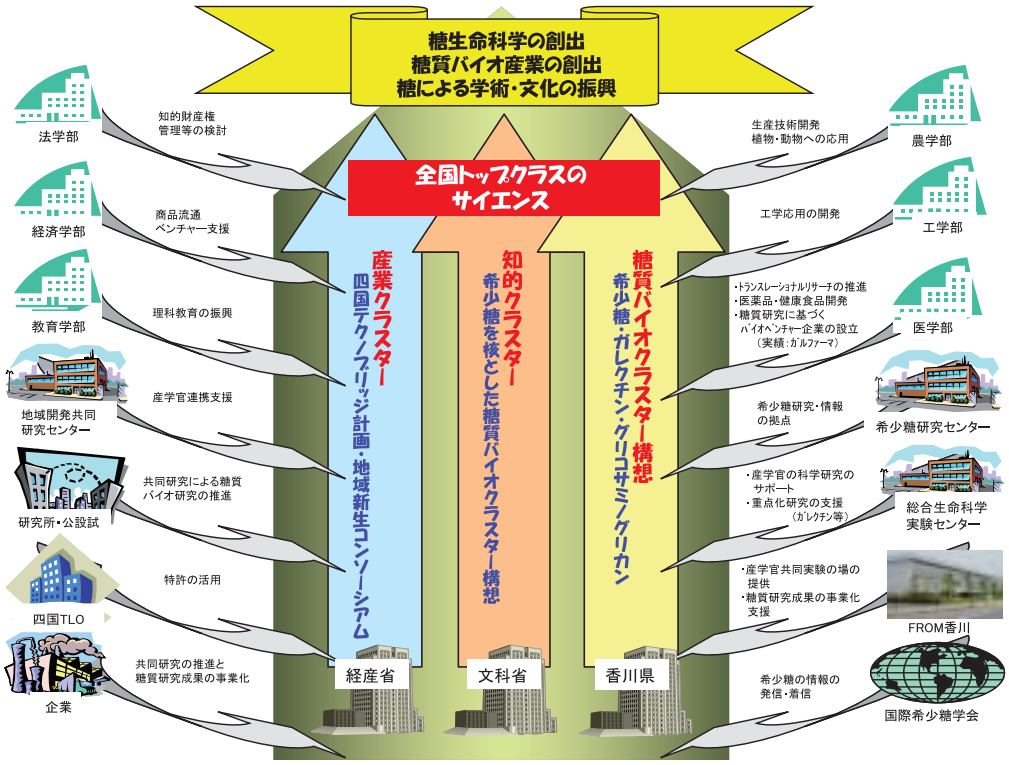
１．希少糖（生理活性単糖）から新しいライフサイエンス（糖生命科学）の創出を

２．讃岐三白（砂糖、塩、綿）を希少糖でパワーアップ、香川を糖質バイオ産業の拠点に

３．生態系にやさしい「糖」に潜む新機能で、人類の健康・福祉への貢献を

希少糖研究は、本学のガレクチン研究などとともに、糖質バイオ研究の中心的研究課題のひとつとして注目されています。本研究を通じて基礎研究を振興し、それに基づく応用研究の発展を目指しているのです。香川医科大学各位のご協力をお願いします。

図８


糖生命科学の創出
糖質バイオ産業の創出
糖による学術・文化の振興
全国トップクラスの
サイエンス
産業クラスター
四国テクノブリッジ計画・地域新生コンソーシアム
知的クラスター
希少糖を核とした糖質バイオクラスター構想
糖質バイオクラスター構想
希少糖・ガレクチン・グリコサミノグリカン
経産省
文科省
香川県
法学部
知的財産権
管理等の検討
経済学部
商品流通
ベンチャー支援
教育学部
理科教育の振興
地域開発共同
研究センター
産学官連携支援
研究所・公設試
共同研究による糖質
バイオ研究の推進
四国TLO
特許の活用
企業
共同研究の推進と
糖質研究成果の事業化
農学部
生産技術開発
植物・動物への応用
工学部
工学応用の開発
医学部
・トランスレーショナルリサーチの推進
・医薬品・健康食品開発
・糖質研究に基づく
バイオベンチャー企業の設立
（実績：ガルファーマ）
希少糖研究センター
希少糖研究・情報
の拠点
総合生命科学
実験センター
・産学官の科学研究の
サポート
・重点化研究の支援
（ガレクチン等）
FROM香川
・産学官共同実験の場の
提供
・糖質研究成果の事業化
支援
国際希少糖学会
希少糖の情報の
発信・着信

極寒の地での極上の思い出

医学科５年
杉山　　豊

2002年３月のカルガリは10年に１度とも言われる大寒波で、外気は－25℃にも至り、歩けば鼻の中まで凍りつく極寒の地でした。そこで僕は今までの人生の中でも最もホットな時間を過ごすこととなったのです。

僕等はあちらのもうすぐ２年生というクラス（３年で卒業なので気分的には日本の５年生くらいかなと…）に参加しました。英語だらけの大学の講義を現地の学生とともに受け、さらに症例に関する討論会に参加できるという、普段の学生生活では味わえないとても貴重な体験ではあったのですが、英語力、知識ともになかなか満足に太刀打ちできるものではありません。あちらの学生は発言などの積極性がすごくて、討論などはカンファレンスかと思うほど真剣なために非常に活発な授業でした。僕はもう必死で同級生に英語で質問するなどして、少しでも理解しようともがきました。初めはこんな状態で言葉の壁を乗り越えられることができるのかという不安があったのですが、授業以外のイベントにも助けられ、徐々に慣れていきました。

ホッケーに魅せられて。学友と。

多国籍のお別れパーティー。矢印の４名が香医大生。

入学して最初の週末にクラスメイト達とスキーツアーに出かけました。このツアーはただの遊びではなく、僻地医療に携わっている医師の話を聞くとか、病院見学、救急隊員の体験談を聞くといった要素も盛り込まれたものでした。時間に余裕を持った場であった為、授業よりも発言することができ、日本とカナダの違いだとか、将来どういった医師を目指すのかなどを仲間たちと話をする機会となり非常によかったです。もちろんスキーは楽しみ、夜は話をしてくださった医師の方も一緒になってダンスパーティーやゲームを楽しむことができ、カナダの文化を肌で感じることもでき最高な気分でした。

もうひとつ最高の思い出となったのは、１度はしてみたいと思っていたアイスホッケーにチャレンジできたことです。クラスメイトに頼み込んで授業後にリンクに連れて行ってもらい、半ば強引に参加しました。もちろん上手くはできませんが、必死に滑りながらついていこうとしたら、身振り手振りも交えて教えてくれ、最後にはお情けゴールも決めさせてくれました。僕がクラスメイトとの距離を縮めることができたのはこれが一番大きかったと思います。

まだまだ楽しかったことを挙げればキリがありませんが、僕にとって大きな財産となったことは、置かれた環境は違うけれども同じ医療というフィールドを目指すカルガリの学生と、人生観や考え方などを話すことができたことです。もちろん馬鹿話や笑える思い出話も交えながらですが…そしてどんな学生もイベントや遊ぶことに対する姿勢は勉強に対する意欲同様にパワフルだということが再認識できました。多くの場面でこのパワーに負けるわけにはいかないと、良い意味でライバル心が生じた事は僕にとってプラスとなっています。カルガリ留学での思い出はこれからも僕を刺激し続けていくことでしょう。

カナダ体験記

医学科４年
鈴山　寛人

2003年３月３日私はクラスの仲間４人と共に大阪国際空港からカナダのカルガリーへ向けて旅立ちました。その日は第３学期の試験が終わって間もない時であったので６週間の滞在に必要な用意が充分できていなかったように思います。かくしてあっという間にカルガリーへついた私たちは次の日から早速カナダの学生と共に授業を受け始めました。今回の短期留学では腎臓のコースに参加するということでしたので、３学期の試験勉強をする傍ら、腎臓について第二内科、泌尿器科の先生方の助けを借りながら自分なりに用意はしていたつもりですが、いざ授業が始まってみると、まず先生が話す内容を把握するのに一苦労だっ

ここで授業をうけました。（Health science center）

たし配られるノート、クラスメイトの質問と何から何まで容赦のない英語がとびかってましたので、自分が普段使わない言語で何かを学習することの厳しさを肌で感じることができました。もちろんクラスメイトは親切な人ばかりで、授業についてわからないことがあれば何でも聞いてねと言ってくれるのですが、彼らが話す英語は先生のそれよりもさらにレベルの高いものでした。授業自体はさすがに良く考えられていて、最初の授業は浮腫についてでしたが、病院の方から、おそらく心不全の患者さんだったと思いますが、教室に来ていただいて実際に浮腫がどのような病態であるのか経験を通じて教えて頂きました。カナダに滞在中は土日を除いて毎日学校に行くことになってましたし授業についていくのが精一杯だったので、遊びに行くなんてことはあまりなかったのですが、週末には仲良くなった友達にスノボへ連れて行ってもらって一日中滑って転んで汗をかいたり、また別の日には友達とNHL（ホッケー）を見に行ったりもしました。時には映画をみたりバーベキューを皆でやったりと楽しい思い出も作ることができました。しかし本当のところこの６週間で何をやっていたのかと聞かれると、間違いなく勉強をやってましたと答えることになります。おかしな話ですがここ数年で一番真剣に勉強したのではないでしょうか、今回の短期留学では行く前から最終的に試験を受けて帰ってくると言うことが分かってましたので、こんなチャンスは滅多にないと自分に言い聞かせ、やるからには精一杯やってカナダの学生と全くおなじ条件で試験を受けてどのくらい自分ができるのかを確かめたかったのだと思います。40日間という時間をカナダで過ごして日本に帰ってきた時になんともいえない充実感と達成感を感じることができたのもそれだけ真面目に取り組んだからで、自分にとって生涯忘れられない期間となっていくはずです。次にまたこういう機会があれば是非行ってみたい、そして新たな可能性を発見したい、そう思います。

スノボをやってきました。（２日間）

マレーシアの友人と（右２人）。左３人は日本人。

記念講演レポート

田中あゆみ
（平成元年卒）

昨年は、第１回関西支部会として多くの同窓生とともに楽しい時間を過ごすことができました。今年はさらに学術講演会が企画され、楽しいだけでなく、講師の先生方のお話は、同じ学び舎で育った医師として、とっても刺激的で学問への探究心を呼び覚ましてくれるものでした。

時は２月16日、場所は昨年同様ホテルグランヴィア大阪でした。関西支部会会長の磯篤典先生の開会宣言で午前11時過ぎに講演会が始まりました。まず、Ｓ61年卒の梅垣修先生から「麻酔科医による院内感染対策」についての講演があり、手術部やICUの

梅垣修先生の講演

環境整備から病院全体を含めた感染症対策まで、CDCのガイドラインを中心にわかりやすくお話してくださいました。ついつい癌などの大きな疾患に目がいってしまいがちですが、SARSをはじめとして、感染症は人類にとって古くて新しい最も恐るべき疾病かもしれません。いかに感染を予防しコントロールし得るかが重要であることを再認識できました。つづいては、Ｓ62年卒の島田健永先生から「赤ワインとお茶は心筋梗塞を予防する」という、聞いただけでも嬉しくなるようなテーマの講演がありました。冠動脈疾患の診断に有用な冠血流予備能（CFR；Coronary Flow Rezerve：最大反応充血時の血流量／安静時血流量）が経胸壁心エコーによって、非侵襲的に測定可能であることも驚きでしたが、これが赤ワインやウーロン茶のポリフェノールにより増加するとのこと！実に喜ばしいことであり、講演会のあとの懇親会で早速赤ワインをしっかり飲んだことは言うまでもありません。こういう臨床に直結する研究は、やっぱりおもしろいということを改めて実感させていただきました。最後に髙橋則尋讃樹會会長より「香川医科大学と讃樹會の今日・明日」と題して香川医科大学から香川大学医学部になるであろうこと等、今後の同窓会のあり方についてお話を聞かせていただきました。卒業した香川医大がなくなるのは寂しいことですが、讃樹會はこれからも続けていただけるようでほっといたしました。ここで記念写真を撮影し、懇親

島田健永先生の講演

高橋則尋讃樹會会長の講演

会へ。清元秀泰先生の名調子の進行で、昨年につづいて御出席いただいた来賓の宇多弘次先生のご挨拶の後、同じく島田眞久先生による乾杯のご発声で赤ワインとウーロン茶の世界へ。楽しい時間はあっという間に過ぎ、磯会長の音頭で一本締めにて閉会となりました。

今回は、前回に比べて出席者の数が少なかったのが残念でした。来年は、是非また多くの先生方に出席していただいて、楽しく実りある会になればと願っております。最後になりましたが、清元先生をはじめ裏方で会を支えて下さっている事務局ならびに幹事の先生方に深く感謝いたします。ありがとうございました。

支部会開催報告

前田　敏樹
（平成８年卒）

2003年２月16日、今年も香川医科大学関西支部同窓会が大阪のホテルグランヴィアで盛大に執り行われました。当日は朝から生憎の雨でしたが、久しぶりに会う友の顔を思いつつ、期待しながら会場に向かいました。

磯篤典関西支部会会長の開会宣言の後、今年は昨年と違い記念講演が行われました。Ｓ61年卒の梅垣修先生が「麻酔科医による院内感染対策」の講演を、Ｓ62年卒の島田健永先生が「赤ワインとお茶は心筋梗塞を予防する」の講演をなされました。お二方とも私にとって香川医大の大先輩であり、関西において現在責任ある立場として医学・医療に尽力されている姿に、後輩として誇りに思うと同時に、大きな励みにもなりました。続いて高橋則尋先生が会長講演として「香川医科大学と讃樹會の今日・明日」の講演をされました。卒業生として最も関心があるのは、香川大学との統合や独

磯篤典支部会長の開会宣言

立法人化等についてですが、これらを踏まえ、現在の大学が置かれている状況と、今後についての講演がなされました。個人的には他大学との統合により、『香川医科大学』の名前が仮になくなったとしても、私はいつまでも香川医科大学の卒業生として、誇りを持って仕事をしていきたいと思います。

講演会の後、皆で記念撮影を行い、レセプションへと進みました。元副学長の宇多弘次名誉教授の御挨拶と、前第一解剖教授で現在大阪医科大学学長の島田眞久先生による乾杯の後、そこここで気の合うもの同士話に花が咲いていました。お互いの近況報告や、所属する医局や病院の状況等を話し合い、本当に良い刺激を受けました。また"赤ワイン"の講演のためか、皆さんいつもよりワインのピッチが早かったように思えました。隣に座っていた某先生は「ワインもアルコールやし、ま、俺はビールで行くわ…。」と、かなりの勢いで飲んでおられたのが印象的でした。皆さん、久しぶりに気の許せる仲間とあって、大いに飲んで盛り上がっておられました。

関西支部同窓会に集まる面々の多くは母校から離れており、時に寂しささえ感じることもあります。そんな中、やはり香川医科大学の卒業生として、年に一度こうして集まることは、ある人にとっては懐かしく、またある人にとっては励みとなり、明日への力となって行きます。香川医科大学の卒業生が、関西はもとより日本全国、さらには世界にまでその活躍の場を広げています。本当に素晴しい事と思います。今後その一翼を担ってゆきたいと思います。

宇多弘次先生のご挨拶

島田眞久先生による乾杯のご発声

一言メッセージ

卒業後10年以上、自分の専門も決まり経験も積んでこられた方々が多いと思います。患者の信頼の厚い医者が一番と思います。
（ご来賓　宇多　弘次先生）

その日は残念ながら、出張中です。皆々様によろしくお伝え下さい。
（ご来賓　市川　佳幸先生）

残念ですが欠席します。兵庫医大に是非お寄り下さい。
（ご来賓　髙光　義博先生）

ご盛会をお祈りします。
（S61卒　沖野　　毅）

なかなか出席できなくて申し訳ありません。みなさまによろしくお伝え下さい。
（S61卒　松下　哲也）

住所変更致しましたのでよろしくお願い致します。
（S61卒　橋本三起子）

申し訳ありませんが、所用の為欠席させて頂きます。皆様のご活躍をお祈りします。
（S62卒　安藤　博重）

残念ですが、所用があり欠席させて頂きます。幹事の先生方、いつも有難うございます。
（S63卒　柴田真理子）

誠に残念ですが、欠席とさせて頂きます。勤務先が変更になりました。
（S63卒　津川　猛士）

H14年４月24日に開院致しました。
（S63卒　中西　源和）

今年も都合で欠席です。残念です。
（H元卒　岸本　正文）

すみません。当直日です。
（H元卒　小林　照明）

昨年は出席させて頂き、約20年も前の学生時代に戻ったように楽しい時間を過ごさせて頂きました。昨年６月に３男を出産し、忙しいながらも楽しくやっております。今回は残念ですが欠席致します。次回を楽しみにしております。幹事様方、いつもご苦労様です。
（H元卒　清水恵美子）

保険医療は益々厳しくなってきていますが、頑張っています。
（H元卒　藤原　史利）

現在、骨折（下腿）後リハビリ中にて今回は失礼致します。皆様に宜しく。
（H２卒　古谷　保人）

肺癌の診断・治療を専門に頑張っています。
（H３卒　小林　政司）

残念ながら今回は都合がつきません。次回を楽しみにしております。
（H３卒　橋本　千穂）

当日は当直翌日となり遠方でありますので次回より参加させて頂きます。
（H４卒　高山　龍烈）

予定が入っておりまして、申し訳ありません。
（H４卒　木下　博之）

第１土曜日なので残念ながら出席できません。
（H５卒　根本　玲子）

出席できず非常に残念です。
（H６卒　大江　秀美）

2003年４月より耳原総合病院精神科（堺市）に転勤します。宜しくお願いします。
（H元卒　東﨑　栄一）

学会、教育セミナーがあり参加できません。来年も誘ってください。
（H７卒　小笠原延行）

都合により出席させて頂くことはできませんが、関西支部会のさらなる発展を期待しております。
（H８卒　中澤　寛之）

今年も欠席させて頂きますが、皆様によろしくお伝え下さい。（H８卒　増井　裕子）

H14. 10. 1～香川小児病院に転勤しました。
（H９卒　谷本　　敬）

当日都合がつきましたら出席させて頂きたく思いますが、よろしいでしょうか。
（H９卒　永谷　周子）

転居しました。
（H10卒　天道　正成）

皆様お元気でご活躍のことと存じます。現在小野市民病院循環器科に勤務しております。次の機会には是非参加させて頂きたいと思います。　（H10卒　柏野　奈奈）

返送が遅れまして申し訳ございません。
（H10卒　岡田　一幸）

転居致しました。大変遅くなって申し訳ありません。　（H11卒　野口　裕子）

今回は参加できず残念です。
（H11卒　野間　雅倫）

次回は出席したいと思います。
（H11卒　長生　幸司）

皆様にお会いできる絶好の機会ですが、用事があって参れません。楽しい会になるよう祈っております。（H12卒　小川　喜久）

お返事遅くなり大変申し訳ございません。
（H12卒　田中　佳子）

今回は都合により出席できませんが、次回以降、よろしくお願い致します。
（H13卒　野々村秀明）

お返事が遅れて申し訳ありませんでした。住所及び電話番号が変わりました。
（H14卒　田中　麗沙）

今回は欠席させて頂きます。申し訳ありません。有難うございました。
（H14卒　前澤　明子）

どこの医局に入ろうか迷っております。とりあえず３年間北野病院におります。
（H14卒　松本　正孝）

出席者一覧

卒年	氏名
ご来賓	宇多弘次先生、島田眞久先生
S61年	髙橋則尋、梅垣修
S62年	磯篤典、谷向茂厚、島田健永
S63年	武田悦子、関本鈴香、清元秀泰
平元年	喜田智幸、田中あゆみ、明渡郁子
平３年	豊田裕敬
平４年	清元加代
平５年	岡本大輔、斉藤三佳
平６年	川口雅功、河原林正敏、蔡由喜、阪本紀子
平７年	福田有子
平８年	前田敏樹
平９年	岡崎太郎、西谷暁子、畑泰司
平10年	稲葉純子
平12年	木村真実
平13年	弓場智子、山本瑞枝

計30名

新入生歓迎行事を終えて

医学科実行委員長
芦谷　啓吾
（医学科２年生）

今年度も、２年生全員が一丸となって、なんとか例年通り新入生歓迎行事を行うことができました。

私自身、12月に実行委員長に決まった時点では、これから一体どのように進めていったらいいか、まず何をするべきかなど、わからないことだらけでした。とりあえず、去年の新歓の実行委員長に色々聞いてみようと思い、連絡をとってみたのですが、開口一番、「思うようにやったらいいんじゃない。」と言われ、自分でやらなきゃいけないんだと、不安になってしまいました。

とりあえず、これからのことを話し合おうと思って、各局長を集めて会議を行いました。実際に会議を開いてみると、みんなしっかりと新歓までのイメージができていたようで、あっという間にこれからの予定が立ってしまいました。それまで１人で何をしたらいいのか悶々と悩んでいたのがあほらしくなるほどでした。

局員の同級生たちは、非常に頼りになる存在でした。スポンサーまわりは例年遅れ気味で、３学期のテスト期間にかぶってしまうことは先輩から聞いていたので、なるべく早く終わらせたいと思っていたのですが、会議のあった次の週までには、もう、スポンサーまわり用の計画書、マニュアル、趣意書などができあがってきて、かなりびっくりしました。

担当してくれた方は、経済学部の出身で、企業に勤めていたこともあり、さすがに１度社会に出た人は違うなあとつくづく思いました。その後も、スポンサーまわりの管理、集計などスポンサー局の人は３学期のテスト期間にも関わらずかなり忙しかったと思います。このときは、スポンサー局だけでなく、企画局などにとってもかなり忙しい時期でした。

問題は山積みでした。バザーの商品がなかなか集まらないとか、パンフレットの印刷直前になって誤りが見つかって修正したりとか、どの局にとっても、新歓に悩まされながらの試験期間だったと思います。

けっきょく、入学式の当日までバタバタと忙しかったのですが、無事新入生を迎えることができて本当に良かったと思います。新歓を立ち上げてからの４か月間、協力してくれた実行委員の方々や同級生たちには、いろんなところで助けてもらいました。私自身、頼りない委員長だったかもしれませんが、新歓が無事に開催できたのも、協力していただいたみなさんのおかげだと思います。

最後になってしまいましたが、当初からいろいろとアドバイスいただいた、学生課の方々、本当にありがとうございました。また、ご支援いただいた方々、本当にありがとうございました。

第97回　医師国家試験結果

順位(前年度)	学校名	合格率	順位(前年度)	学校名	合格率
1（ 1）	防衛医科大学校	100	41（67）	岩手医科大学	90.5
1（ 3）	自治医科大学	100	41（23）	宮崎医科大学	90.5
3（ 8）	三重大学医学部	98.0	41（55）	大阪医科大学	90.5
4（ 2）	札幌医科大学	97.9	44（69）	福井医科大学	90.2
5（ 4）	東京医科歯科大学医学部	97.6	45（51）	山口大学医学部	90.0
6（34）	山形大学医学部	97.1	45（39）	関西医科大学	90.0
7（ 6）	群馬大学医学部	96.7	47（32）	聖マリアンナ医科大学	89.9
7（10）	順天堂大学	96.7	48（52）	九州大学医学部	89.8
9（17）	岐阜大学医学部	96.4	49（75）	日本医科大学	89.7
10（ 7）	東京慈恵医科大学	96.2	50（43）	日本大学	89.6
11（12）	慶應義塾大学	96.0	51（50）	奈良県立医科大学	89.5
12（ 5）	横浜市立大学	95.7	51（48）	産業医科大学	89.5
13（28）	香川医科大学	95.0	53（40）	信州大学医学部	89.3
13（15）	名古屋大学医学部	95.0	54（33）	高知医科大学	88.5
15（24）	滋賀医科大学	94.9	55（57）	京都大学医学部	88.4
16（12）	大阪市立大学	94.8	56（61）	山梨大学	88.3
17（ 9）	岡山大学医学部	94.7	56（31）	大分医科大学	88.3
18（26）	弘前大学医学部	94.6	58（79）	愛知医科大学	88.2
19（15）	名古屋大学医学部	94.5	59（17）	東邦大学	88.1
20（14）	筑波大学医学専門学群	94.3	60（58）	秋田大学医学部	87.8
20（12）	大阪大学医学部	94.3	61（64）	熊本大学医学部	87.5
22（45）	新潟大学医学部	94.2	62（55）	長崎大学医学部	87.3
22（41）	富山医科薬科大学	94.2	63（44）	鹿児島大学医学部	87.2
24（38）	福島県立医科大学	94.0	64（71）	福岡大学	86.7
24（16）	東京大学医学部	94.0	65（47）	金沢大学	86.6
26（28）	旭川医科大学	93.9	66（77）	独協医科大学	86.4
26（ 4）	東京医科大学	93.9	67（70）	近畿大学	86.0
28（37）	京都府立医科大学	93.7	68（68）	東海大学	85.6
29（25）	神戸大学医学部	93.5	68（53）	千葉大学医学部	85.6
30（41）	広島大学医学部	93.0	70（59）	島根医科大学	85.5
30（30）	北海道大学医学部	93.0	71（76）	兵庫医科大学	85.4
32（61）	川崎医科大学	92.7	72（49）	琉球大学医学部	84.9
33（27）	和歌山県立医科大学	92.4	73（66）	東京女子医科大学	84.7
34（78）	埼玉医科大学	91.5	74（63）	杏林大学	83.9
34（46）	東北大学医学部	91.5	75（53）	藤田保健衛生大学	83.8
34（35）	佐賀医科大学	91.5	76（79）	帝京大学	83.0
37（65）	徳島大学医学部	91.3	77（73）	北里大学	82.8
37（21）	愛媛大学医学部	91.3	78（60）	鳥取大学医学部	81.6
39（19）	浜松医科大学	91.1	79（72）	久留米大学	80.8
40（22）	昭和大学	90.7	80（74）	金沢医科大学	80.0

	受験者数	合格者数	合格率
全　国	8719（9226）	7881（8374）	90.4（90.4）
本　学	120（　99）	112（　93）	93.3（93.9）

（　）は前年度

	受験者数	合格者数	不合格者数	合格率
新卒者	115（77）	109（74）	6（3）	94.8（96.1）
既卒者	5（22）	3（19）	2（3）	60.0（86.1）
計	120（99）	112（93）	8（6）	93.3（93.9）

新制香川大学の役職者決まる

「香川大学」統合後の初代学長予定者が決定

平成15年８月６日（水）に実施された新学長第二次選挙の結果を踏まえ、つづく８月８日（金）に第二回統合後の香川大学創設準備委員会が開催されました。同委員会は初代学長予定者の選考について審議を行い、木村好次氏（現香川大学学長）を初代学長予定者として決定しました。

医学部長は岡部氏、病院長は長尾氏に

８月20日（水）に実施された新医学部長選挙において、岡部昭延氏（現分子微生物学教授）が、香川大学医学部長に決定しました。

つづく、９月３日（水）の選挙に新大学病院長おいて、長尾省吾氏（現脳神経科学教授）が、香川大学附属病院長に決定しました。

副学長に、芳澤氏と竹内氏

また、９月12日（金）の創設準備委員会において、新大学の副学長として、政策担当が芳澤宅實氏（現香川大学副学長）、教学担当が竹内博明氏（現香川医科大学看護学科長）が決定しました。

第３回理事会
議　事　録

日　時　平成15年１月27日
　　午後７時～午後９時
場　所　高松ワシントンホテルプラザ
　　チャイナテーブル
出席者　理事長　　関　啓輔
　　名誉会長　　濱本龍七郎
　　会長　　髙橋　則尋
　　学術委員長　木村　正司
　　平川栄一郎（Ｓ61年）
　　泉　　佳成（Ｓ62年）
　　伊藤　　理（Ｓ63年）
　　佐々木　潔（H元年）
　　田井　祐爾（Ｈ４年）
　　松向寺孝臣（H11年）　　以上合計10名参加（委任状25名）

議題及び経過

①　会報・名簿発刊報告

会報25号（平成15年１月号）と、2003年版会員名簿の１月末発刊に向け、準備を進めている旨、髙橋会長から報告があった。

②　国外留学助成金の審査基準について

前回の理事会を受け、国外留学助成金の応募者を採択するにあたり、選考方法や選考基準について、学術委員会難波経立先生作成によるたたき台を基に審議された。学術委員会による一次審査（書類審査）の通過者に対し、理事会で二次審査（書類審査）を行う。

③　ＨＰのバナー広告の承認について

ＨＰにバナー広告を募集するのは、法人化後の方がいいのではないかという意見が多く、見送りとなった。

④　讃樹會ロゴマークについて

会報26号（発行予定　H15年初夏）にて公募し、次の総会で決定する。

⑤　安岐康晴先生（Ｈ３年大学院修了生）の理事就任について

これまで大学院修了生会員の理事は不在だったが、安岐康晴先生の理事就任が満場一致で認められた。

第４回理事会
議　事　録

日　時　平成15年８月18日　午後７時～午後10時
場　所　香川医科大学　基礎臨床研究棟４Ｆ　Ａ会議室
出席者　理事長　　関　啓輔
　　名誉会長　　濱本龍七郎
　　会長　　髙橋則尋
　　事務局長　　乾　政志
　　財務委員長　安岐康晴
　　調査委員長　宮部和徳
　　編集委員長　清元秀泰
　　学年理事　　河井信行（Ｓ62年）、伊藤　理（Ｓ63年）、田中宏和（Ｓ63年）、
　　外山芳弘（Ｓ63年）、宮本　修（Ｈ元年）、川西正彦（Ｈ５年）、
　　森上徹也（Ｈ７年）、加塩裕美子（H11年）、松向寺孝臣（H11年）
　　難波経立（H12年）
　　以上合計17名参加　（委任状12名）

議題及び経過

①　形成外科学教授選の結果報告

清元先生より、形成外科学教授選挙の経過及び結果報告がなされ、新しい教授には北海道大学医学部形成外科学より井川浩晴助教授が就任されることの報告があった。

②　安岐康晴先生の財務委員長就任について

髙橋会長より、財務委員長がしばらく不在であったが、H16年４月に開催される総会に向けて会計予算案作成など今後、財務委員長が不在では不便なことが多いので理事の安岐先生を財務委員長に推薦したいと提案があった。
満場一致で認められた。

③　平成15年度第１回国外留学助成金審査

今回申請のあった野間貴久先生Ｈ８年卒、人見浩史先生Ｈ８年卒（学術委員会での第一次審査済み）両名の推薦者より推薦理由の発表があり、その後、前回理事会で決まった国外留学助成金の審査基準に基づき、参加理事全員の無記名投票が行われた。
結果、両名にそれぞれ21万６千円の交付が決定された。

④　会報発刊状況について

清元先生より、本年１月号（25号）の発刊報告がなされ、次号の発刊時期（予定では８月中に発送）・会費未納者に対する対応について意見を求められた。
今回は学長選挙、医学部長選挙、病院長選挙など特別なことがあった為予定より大幅

に遅れたが、９月中旬をめどに会長選挙告示を入れて発刊する。（新年号には総会案内・立候補者の所信表明を掲載し、投票用紙を同封する）
また、会費未納者に対しては、最後の会報発行となることを告知する。

⑤　その他

1. 国外助成金の申請書に業績欄を設けてはどうか？とう提案があった。
2. 会長選挙についての大まかなタイムスケジュールについて
3. 濱本名誉会長より、今後の同窓会のあり方（どういう会にしたいのか）について参加者一人一人に考えを求められ、参加理事より活発な意見が述べられた。

同窓会会長選挙告示

平成16年３月の任期満了に伴い同窓会会長の選挙告示を行います。
下記の同窓会会長選挙規定をご確認の上
立候補される会員の方は平成15年12月20日までに事務局までご連絡下さい。
但し、立候補者一人の場合は信任となります。

選挙実施委員会
乾　政志（同窓会事務局長）

同窓会会長選挙規定

第１条　本規定は、会則第10条第２項の規定により、香川医科大学同窓会会長選挙の実施にあたっての手続き等を定めるものである。

第２条　選挙実施委員会

1　理事会は会長選挙の告示に前もって、会長選挙実施委員会を特別委員会として設置しなければならない。

2　事務局長が立候補の意思ある場合は、少なくとも会長選挙告示前にその職を辞さなければならない。

第３条　投票有権者及び被選挙権者

会長選挙の投票有権者及び被選挙権者は、会則第10条及び会則第５条第１項に基づき、選挙告示現在に本会正会員とする。その確定は、選挙実施委員長の責任において行う。

第４条　選挙告示

会長選挙の告示は総会の少なくとも６ヶ月前に正会員に会報をもって行う。

第５条　会長選挙立候補者の所信表明開示

1　会長選挙立候補者は、所信表明を会報において正会員に開示しなければならない。

2　会長選挙立候補者は、正会員の中から少なくとも５名の推薦人氏名を公開しなければならない。

第６条　投票方法及び締切

1　投票用紙は、会長選挙立候補者の所信表明開示と共に投票有権者に送付する。

2　投票は、郵送をもって、あるいは直接届けられたもので、厳封された記名単投票とし、本人自署の無いものは無効とする。

3　投票は、総会開催宣言までに届けられたものを有効とし、以後のものはその効力を認めない。

4　投票用紙は、選挙実施委員会が厳重に管理する。

第７条　開票及び開票時の問題処理

1　投票用紙の開封は、総会において公開して行う。

2　投票に関して不明な場合は、総会出席者全員の判断に従う。

第８条　選挙結果の報告

選挙実施委員長は、会長選挙結果について、得票順に得票数を付記した全得票者氏名を本会会員に報告する。

第９条　異議申し立て

1　正会員は、選挙終了後60日以内に総会もしくは理事会において会長選挙に関する異議申し立てをすることができる。

2　理事会は、正会員の中から異議申し立てがある場合、直ちに会長選挙調査委員会を設置し、30日以内に理事会に報告させなければならない。

第10条　罰則

1　不正投票を行った場合、投票は無効となり、理事会において処罰される。

2　選挙活動において金銭授受や悪意に満ちた中傷などを行ってはならない。これを行った場合、理事会で処罰される。

付　則

本規定は2000年４月16日より実施する。

〔讃樹會ロゴマーク募集！〕

香川医科大学同窓会の新しい呼称である『讃樹會』は、昨年の会報や本年の名簿等、その都度、表紙を飾っていますので、自ずと会員のみなさまの目にもとまり、徐々に馴染んできていただいているのではないかと存じます。

つきましては、今回、新しくロゴマークを募集します。これまでは、大学のマークをそのまま使用してまいりましたが、新呼称に対応して、オリジナルなロゴを作れればと存じます。

讃樹會の題字同様、当会の象徴として今後、永久的に残ります。

募集要項は下記のとおりです。是非ともふるってご応募いただきますようお願いします。

応募締切　；　平成15年12月末日
応募方法　；　自由（郵便、FAX、Eメール、FD、CD他）
応募資格　；　会員に限る
選考　　；　平成16年の同窓会総会にて決定
謝礼　　；　当選者には１万円の謝礼をお出しします。

参考

香川医科大学の
ロゴマーク

他大学同窓会ロゴマーク一覧

東京大学医学部
鉄門倶楽部

筑波大学医学部
桐医会

群馬大学医学部
刀城クラブ

東北大学医学部
同窓会

弘前大学医学部
同窓会

秋田大学医学部
同窓会

北里大学医学部
同窓会

岐阜大学医学部
同窓会

大阪大学医学部
学友会

滋賀大学医学部
湖医会

奈良県立医科大学
同窓会

山形大学医学部
医学部のロゴマーク

香川医科大学同窓会讃樹會
国外留学助成金公募のお知らせ

香川医科大学同窓会では、本学の発展に寄与することを目的として、本学研究者の国外留学に対して以下の要領で助成事業を行っています。平成15年度第２回応募締め切りは、同10月末日です。留学予定あるいは現在留学中の正会員は是非ご応募ください。

対　　象　：　香川医科大学同窓会正会員の１年以上の国外留学
助 成 額　：　年間数件程度、総額100万円以内
申請方法　：　所定の申請書（同窓会事務局に申請して下さい。）
締め切り　：　平成15年度第２回　平成15年10月末日
　　平成16年度第１回　平成16年３月末日
　　（通常は半期ごとに審査を行なっています。）
提 出 先　：　〒761－0793
　　香川県木田郡三木町池戸1750－１
　　TEL＆Fax.（087）840－2291
　　e-mail：dousou@kms.ac.jp
審査方法　：　期間内に応募された讃樹會国外留学助成金交付申請に対して、一次審査基準に基づき学術委員会において書類審査を行い、理事会に答申する。理事会では一次審査経過を確認の上、二次審査基準をもとにそれぞれの申請に対する採択の是非と給付金額を決定する。（一・二次審査基準の詳細は同窓会事務局にお尋ね下さい。）

香川医科大学同窓会讃樹會
会　長　　髙橋　則尋
学術委員会
委員長　　木村　正司

平成15年度（第１回）国外留学助成金選考結果報告

理事会では下記の通り２名に平成15年度第１回香川医科大学同窓会国外留学助成金の交付を決定いたしました。

助成対象者　：野間　貴久（平成８年卒）香川医科大学薬理学
留学先機関　：Duke University Medical Center
留学期間　：平成15年７月～平成17年６月
研究課題　：心肥大と心不全における生理学的
　　ならびに分子生物学的機序解明
助 成 金　：216,000円

一時帰国中の野間先生に乾事務局長から授与

助成対象者　：人見　浩史（平成８年卒）香川医科大学第二内科
留学先機関　：Emory University, Department of Medicine, Division of Cardiology
留学期間　：平成15年７月～平成17年６月
研究課題　：１）心血管系における酸化ストレスの影響の解明
　　２）物理学的応力の血管に対する影響の解明
　　３）糖尿病のおける酸化ストレスの動態解明
助 成 金　：216,000円

脳出血後における潜在的神経再生の可能性
＜ミシガン大学脳神経外科留学報告＞

中村　丈洋
（平成７年卒）

はじめに

平成14年10月１日付けで、本学脳神経外科教室から米国ミシガン大学脳神経外科に研究員として留学いたしております。今回の留学に際しまして、同窓会讃樹会より留学助成金を御交付いただき、同窓会役員理事および同窓会の皆様方にあつく御礼申し上げます。

ミシガン大学（図１）は、ミシガン州最大の都市デトロイトから約60km西のアンアーバー市に位置します。アンアーバー市は、人口約10万人で、デトロイト国際空港も近く、また以前より大学を中心とした学研都市であり、非常に環境に恵まれております。

ミシガン大学脳神経外科では臨床では年間約1500例の手術を施行し、研究では脳虚血、脳出血、脳腫瘍モデルを用いて、病態の解明や新しい治療に向けて多岐に渡り研究が行われております。私は、主に脳出血モデルを用いて、出血後の神経変性のメカニズムおよび対策、潜在的神経再生の可能性とその応用などについて研究しております。その中で潜在的神経再生の可能性について紹介させていただきます。

図１　ミシガン大学メディカルセンター

中枢神経系での神経再生

これまでの定説として、一度損傷した神経細胞の再生はあり得ないとされています。近年、神経前駆細胞が、中間系フィラメントタンパクであるnestinを発現していることがわかり、現在発展の著しい再生医学の分野で応用されています。脳虚血や神経外傷モデルにおいて、損傷周辺部にnestin陽性のグリア細胞が多数出現することが報告されており、この現象が神経再生に関与していると考えられています。しかし、nestin陽性の神経細胞の報告は少なく、損傷部に神経細胞の再生が起り得るかは、未だ疑問視されています。本研究では、これまで報告されていない脳出血モデルを用いて、潜在的神経再生の可能性について検討しました。

実験方法

脳出血モデルは、ミシガン大学動物実験委員会規定の下、SDラットを用いて右大脳基底核に100μLの自己動脈血を注入し作成しました。評価は、Western Blotおよび免疫染色を用いて経時的なnestinの発現の変化を、さらに神経機能テストで左半身麻痺の改善の有無について検討しました。

結果および結論

脳出血後より１週間までの間は、損傷周辺部にnestin陽性のグリア細胞が多数みられ、神経機能の著しい低下を認めました。

脳出血後２週目位より、脳室下層から白質を経由し損傷部にかけてnestin陽性神経様細胞の遊走と見られる所見を認めました（図２）。この神経様細胞は、nestin以外にも神経細胞の指標であるNSEや細胞増殖の指標であるKi－67も陽性を示しました。また、この時期より神経機能の改善も認めました。

以上のことから、実験的脳出血後において遊走現象を介した神経再生の可能性が示唆されました。今後、損傷初期に見られるnestin陽性のグリアとその後に見られる神経様細胞の関係などについて検討が必要と思われます。なお、詳細につきましてはBrain Research掲載予定となっております。

最後に、今回の留学にあたり、ミシガン大学脳神経外科教授Julian Hoff先生、香川医科大学脳神経外科教授長尾省吾先生、そして同窓会の皆様方に心より感謝申し上げます。

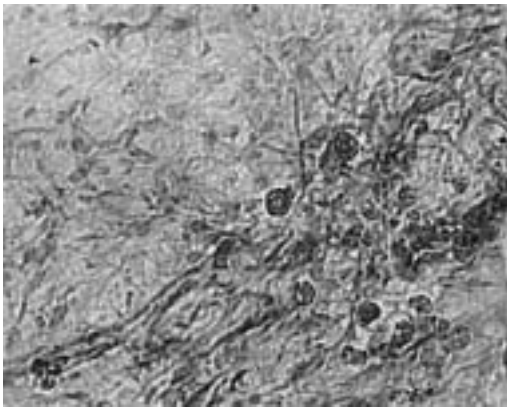


図２　大脳白質におけるnestin陽性神経様細胞の損傷部への遊走

ネパール国際ボランティア

清元　秀泰
（昭和63年卒）

平成14年12月、私は国際CAPD学会で香港の安ホテルに泊まっていた。学会最終日の12月15日夜、近所の安い中華料理店で同僚の松原先生と田鶏（鶏を注文したが、それは"蛙"だった）を食べて、眠りに就こうとした矢先、突然電話が鳴った。

「医者がいないんです。１月19日から国際ボランティアの医師兼通訳でネパールに行ってくれませんか…。」なぜ香港のホテルまで国際電話をかけてくるのか解らなかったが、「忙しくて行けない」と伝えると、「とにかくお願いします。そんな所に行ってくれるのは清元さんしかいないですよ…。ビザ発給を急いでも２～３週間かかります。どうか、ご家族と相談して正月明けには返事を下さい。」

ネパールという国を私はどれだけ知っていたのであろうか。ヒマラヤ山脈、エベレストのある王国、ブッダ（お釈迦様）ゆかりの地。送られてきた企画書を読んで、アジアの最貧国ネパールが見えてきた。治安も悪く、衛生環境は最悪。狭い国土に2000万人！標高は海抜60m～8848mまで、亜熱帯から高地北極気候まである中国とインドの狭間。驚くことに、自宅にトイレのある家が25%未満！大した産業も無いというのに首都カトマンズは排ガスとゴミの山。美しい神々が宿る山々をイメージしていた自分がいかにも無知。「よっぽどの事が無ければ普通の医者は参加しないなぁ…。」と思った時、担当者の「そんな所に行ってくれるのは清元さんだけ…。」の意味が判った。正月明けに上司である第二内科河野教授に相談すると、「私も昔、メキシコのユカタン半島に行ったことがありますよ。まぁ、水には注意して…。」と、あっさりOKが出てしまった。

かくして、私は週１便しかない大阪～カトマンズ便の機上の人になりました。かなり年代もの飛行機で８時間、ようやくカトマンズに到着。そこはまさに終戦直後の日本の田舎町。ただ、カービン銃をもった兵士がやたらと目に付く空港周辺。物凄いカルチャーショックを受けながら、カトマンズ市内の値段だけ高級なホテルに投宿。風呂に入ろうと湯船に水を張ると泥水が…。いくら待てども茶色の水が虚しく溜まっていく。日本では安全と水は"ただ"みたいと言われるが、さすがネパール。半端じゃない、と妙に納得して入浴。

翌日、使節団はまず葬儀場に行き、ネパール人の死生観に触れる。焼かれた遺灰はそのまま川へ。人々はその水を飲む。川には死体だけではない、排泄物、家庭ゴミも流す。これじゃ、病気になる。せめて、

文部スポーツ省に表敬訪問

文部大臣と背後にかかる国王の肖像

上水道だけでも整備すれば…。

さらに翌日、ポカラという町の難民キャンプ（多くはチベットからの難民）へ。ネパールは隣国中国との間で14世ダライラマとチベット領有を廻り複雑に対峙し、国内では毛沢東思想信奉者（Maoist）が爆弾テロを敢行している。加えて、ネパール王室のクーデター（ビレンドラ国王が皇太子に殺害されたことになっているが、国民の大半は難を逃れたとされている弟ギャレンドラ現国王が王宮内で王一族を殺害したと信じている…）で国王が交代するというネパール版"大化の改新"が、政情不安に拍車をかけている。国境付近からはチベット難民が大量に流入しているというが、どこまでが難民でどこからが定住者か判らない。それほど、国民は疲弊している。でも、人々はなぜか明るい。ネパール国民のほとんどがヒンズー教徒というが、自宅では仏教、ラマ教、イスラム教まで何でも祀っているという。なんだか、八百万の神を信じている日本人に似ている。

キャンプに２日滞在し、カトマンズに戻り文部スポーツ省大臣（Devi Rrasad Ojha氏）に面会。短期的な日本の援助を期待するネパール政府と、衛生・教育の土台を作るべきとの当方の意見は平行線。この折衝から、まず衛生観念（ゴミを川に捨てない、どこにでも排泄しない、手を洗う、水は煮沸するなど）を教育・実践する学校を作ることが急務と、次年度からの行動目標を合意。そこで、教育した者を日本の企業が採用し、更に２年の技術研修を日本で行い、次世代のためにネパールに戻す。これで、うまくいくかどうかは不明だが、何かしなければこの国に明日はない。会談中、驚くことが次々判った。ネパールには医師がほとんどいない！医師として働いても給料が出ないらしい。皆、医師免許を得ると近隣のインドやバングラディシュに行ってしまうらしい。勿論、医療保険制度など全く無い。それだけ国全体が貧しいのだ。私が日本語を英語に、その英語をネパール語に次官が変換する、という変な交渉だったが、ネパールの現実と苦悩が判った実りある会談だった。ただ、当の大臣が選挙も経ずクーデターで政権を取った戒厳令政府の一員であるという事から、支援企業グループからは慎重論が出たのも事実…。

無事、会談も終わり、「次もよろしくお願いします。」と、コーディネーターのD. M. ヒラチャン氏。私は何も言えなかった。１週間ネパールにいて、自分の足で多くの場所を見た。学校にも行かず物乞いする子供たち。スラムや難民キャンプもあれば、立派なプールやサッカー競技場もある。「これらの立派な施設は中国政府からのODAによって出来ました。」と、現地職員の誇らしげな言葉。中国政府がこれだけのことを

公衆便所。トイレットペーパーなどない。

しているのに、あなた方は無関心だ、もっと援助すべきだ、とも言いたげ。でも、その中国にODAとして日本政府はどれほどの金額を援助しているのだろう。何か釈然としない。外交下手の日本政府を批判したくなる。金満国日本は我々の税金を使っていったい何をしているのだろう。

明るいキャンプの子供たちと私

最終日に訪れたチミ市では、このボランティア団体の行った井戸堀事業と陶器工場を視察。そこでは物凄い人々の歓迎があり、我々が忘れていた"労働"の楽しさと仲間意識を実感できた。そして、初めて私はネパールで公衆便所を使用した。ここでは、衛生教育が少しは根付いているのが実感できた。勿論、紙は無い。そこにあるペットボトルの水で手を洗う。これが現実である。

帰国便は深夜11時50分。ホテルをチェックアウトしても随分時間がある。私は仲良くなった人たちと近所のレストランで地酒を酌み交わした。そして、カトマンズを離陸して３時間。激しい嘔吐、下痢に襲われた私は、後悔の念を抱きながら必死の形相で関西空港に到着。やはり、ネパールは秘境である。でも、ひょっとして人間の原点に戻れる場所かも知れない。また、次の機会があれば…、誰か行ってください。

在宅医療を始めて

しのじま皮膚科クリニック
篠島　　正
（昭和61年卒）

ご無沙汰しております。

大学を卒業し、四国を離れて17年、遠く離れた北海道で毎日忙しく働いていると、香川医大や四国での生活を思い返すこともあまりありませんでした。このたび同窓会より突然の原稿依頼があり当時のことが懐かしく思い出され、近況をお知らせするため筆を執らせていただくことにしました。

昭和61年に大学を卒業した私は北海道大学皮膚科学講座に入局。大学病院での１年間の研修の後、釧路市立病院に勤務しました。ここは、札幌や旭川の大学病院から遠く離れた道東の基幹病院で、かなり高度な医療が行われている施設でした。

ここの皮膚科のＦ部長の下で１年間勉強できたことは私にとって非常に大きな収穫でした。

皮疹に対する基本的な診かたや考え方、診断に至るまでの道筋といった皮膚科医としての基本をたっぷりたたき込まれました。当時はこの病院には形成外科がなく皮膚科が形成外科をかねており、本当は形成外科に進みたかったというＦ部長に手術の基本をそれこそ手取り足取り教えていただいた。開業してから外来での小手術を割と苦もなくこなせるのはこのときの経験のおかげです。Ｆ部長はなかなかの酒豪でもあり仕事が終わってからよく誘われ、二人とも泥酔してタクシーで霧の幣前橋を渡って帰ったものでした。

さて、卒後３年目は浦河赤十字病院に一人医長として勤務、４年目、５年目は苫小牧市立病院に勤務しました。５年目に皮膚科専門医の資格が取れたのを機会に翌年５月苫小牧で開業しました。診療圏は苫小牧のある西胆振と日高で、人口約30万に対し皮膚科の開業医はたったの２軒しかないという大変恵まれた環境（？）のせいで経営的には全く苦労しませんでした。それでも増患のため幼稚園で母親を対象に「アトピー教室」を開いたりといろいろなことをやり、開業から５、６年で、１日の患者数は冬で180～200人、夏で220～240人まで増えました。それ以降増えも減りもしない状態が続いています。

４年程前からひょんな事をきっかけに往診を始めました。最初、近所の個人宅や病院から是非にと頼まれて出かけていくうちに依頼が増え始め、今では市内だけではなく遠く日高にまで出かけ、皮膚科のない病院や老人施設、知的障害者の施設を中心に回っています。日高地方は和歌山県とほぼ同じ面積ですが皮膚科の常勤医は一人しかいないという極端な皮膚科過疎地で出かけていくと大変感謝されます。

往診の途中、日高にて

地方への往診は土曜日の午後と月一回、水曜日に朝から回ります。往復約300㎞の道のりを私とうちの看護婦、となりの薬剤師さんの３人で回っていますがその似通った体型から陰では往診肥満隊と呼んでいるようです。

体力的にはきつい面もありますが途中の無人市で野菜をどっさり買い込んだり温泉に入ったりと楽しみながらやっています。

６年前に札幌に自宅を建て高速道路を使って片道60㎞を車で通っております。週２回ほど苫小牧に泊まり適度に夜遊びもしています。

以上市井の皮膚科医として毎日を平凡に忙しく過ごしています。

プライマリケア医５年目の春

飯田クリニック
飯田　靖彦
（平成２年卒）

卒業して13年経ち私も50才を過ぎた。昔国費を無駄に使う高齢医学徒かと危惧された。もう少し頑張って30年ほども勤め上げれば若干の責務は果たせるや？

卒後群馬大学麻酔科に入局し地域中核病院の麻酔・救急医として研修した。専門医を取得した平成８年大学を退局し新潟の厚生連三条総合病院に入職。内科・訪問診療を勉強した。平成11年春さいたま新都心近郊の住宅地区に土地を借りて開業。同期の石井先生も近くで盛業しており心強い。診療の柱は生活習慣病・在宅・難治性疼痛・病診連携。患者は科目を問わず来院する。午前中３時間、午後３時間の診療（土曜午前）。木・日・祝日は休診。昼間に訪問診療が入る。木曜は三条病院で技術維持のため麻酔科医として勤務。

昔先輩にこう言われた。「標榜科目と関係なく得意科目は自然に知れる」、「真面目にやって食えない医者はいない」。しっかり胸に刻んで開業し翌年の４月には来患１日25人、レセプト180枚。黒字転化したものの前途多難。付近は老人が多く、彼らは大病院指向で律儀だから医院を転々とするのは好まない。希に当院に来る理由は近いから以外の何者でもない。肩の力を抜き薄氷を踏む思いを隠し飄々と外来を続けた。ペインは積極的には宣伝せず隠し味とした。

当院職員と薬局職員

訪問診療は面白い。今の私にＧＰとして多少の自信を授けてくれたのは寝たきり患者さん達である。68才重度のパーキンソン病を患い長女の在宅介護で過ごす母親がいた。３年前の朝、笑顔の娘の肩に担がれ彼女が私の外来にやって来た。以来２年間大切に在宅で診ながら勉強させて戴いた。同居している長女のご主人も身動きできぬ義母に尽くしていた。途中長女が妊娠し患者は自分がどうなるのか気を揉んだ。その後彼女はショートステイ先で肺炎にかかりあっけなく死亡した。半年後娘さんが出産した。笑顔の娘さん、今回は３ヶ月の児を抱いて予防接種のため来院。大事な患者を失い悔しい反面、娘さん８年間よくやったよと祝福する気持ちが重なる。かくして患者が医師を作りそれを見て患者の家族やその親戚、知人もやってくる。だから私の外来では縁戚友人関係の把握が大切だ。

次第に患者は増え昨年レセプト枚数が月500枚を越えた矢先の10月に外総診が外された。老人負担１割により受診抑制もかかった。一夜にして経営環境が悪化した。しかし私は余り深刻に考えないことにしている。患者と苦楽を共に出来る今の職業に満足し地域の人に感謝して良しとする。看護師４名と事務員３名に給与を支払い諸経

費を引き残余で家族等と生活できれば幸いである。

最後に木曜の新潟行は楽しみだ。大学時代に妻子共々お世話になった当時婦人科講師の竹内先生（現新潟市民病院産婦人科部長）に三条で時々お会いする。同じく助手の安田先生は最近三条病院の婦人科部長として赴任された。先生方の麻酔医を勤め懐かしさと世の狭さを実感。そしてこの様な麻酔を介する各科の先生方との異業種交流から得る情報は毎日の外来にとても役立っている。

平日の余暇は西村先生に薫陶受けた英語の勉強に充てる。足腰の鍛錬も大切だ。ジョーク：60才迄の夢はスキー１級、英検１級、学位の内どれか一つ取得すること（難易度順？）。

一句　病臥する芯まで届け細きはり
　　好々爺痛みを笑いにして帰り
（汗顔）

市主催の救急教室で市民に指導する筆者

美容外科のゴールを求めて

リッツ美容外科
古屋　富治雄
（昭和63年卒）

近年、保険診療での医療の規制、日々批判される医療ミス、インフォームドコンセント、など私たち医師にとっては、なかなか窮屈ともいえる時代の中で働いているのかもしれません。

医学部を卒業して、医師になって面白いと感じることは十人十色だと思いますが、他の業種と決定的に異なるところは、何かわからないことがありそれについて学んだ技術が直接自分に還元されることではないでしょうか。いわゆる一流企業で働いているエリート社員は、企業のために貢献し、部下や会社を動かすということに生きがいを感じるのに対し、我々医師は本や文献を読んで新しい知識を得たり、日々の診療の中での心の機微に触れたりといった精神的なことに面白みを感じ、それは結果的に自分に知識・情緒および感性といった点で自分自身に還元されるのだと思います。その意味では、何も努力しないぐうたらな医師は（私も時にそうなりたいと思うことがあります）、10年も経てば昔習った医学界での常識が、全く違った新しい常識に変わってしまうために、その時代にふさわしい医療から完全にとり残されてしまいます。

私の現在の美容外科という仕事は、保険が利かない完全な自由診療で、医療の中でもきわめて特異的な分野の仕事で、どこかの医局に入局して美容外科を習得できるというシステムが日本ではまだ確立していません。私は、高校時代から手を動かすことが好きだったので、自分の手で何かを創造することができればいいなあと常々思っていました。私が美容外科を面白いと思う理由は、１つには次々と新しいものを追い求めていけるということです。治療方法が次々と変わっていくので、３年間何もしなければ浦島太郎になってしまうほど、ここ数年はめまぐるしく医療が変わりつつあることです。私の飽きっぽい性格が幸いしているのかもしれませんが、日進月歩の傾向が特に強いのが美容外科の特徴です。とはいえ美容外科手術は、ある程度確立されており本質的には変わりないものの、いわゆる一般外科手術と異なり術者の技量と創意工夫次第で、全く異なった結果になってしまうことはある意味責任重大ですが、次の手術ではもっと良い方法がないものかとついつい寝る前に悩んだりします。手術は時間を競うtime trialではなくて、結果を競う言わばresults trialだと思います。私のクリニックでは手術や診療の内容にもよりますが、１日１人が限界のこともあるし、数人～せいぜい10人程度が１日の診療の限界です。この仕事が面白いと思うもう１つの理由は、美しいもの、整ったものを創りだすということに、単に私が心惹かれるからで

診察時の真面目顔

す。誰でも思うことでしょうが、もっと美人に生れてきていれば違った人生だったかもしれません。美男美女が必ずしも幸福というわけではありませんが、それに越したことはないでしょう。美しい顔を創る、顔を整えるという美容外科は医療単独ではなく、少し芸術的な感じを必然的に伴いますが、そういった部分も含めて私は面白いと思ってしまいます。

どの分野の医療もきっとそうなのでしょうが、５年や10年で極めるなどということは不可能なことで、この道に従事して以来、私の当初の見えていたはずのゴール地点に１歩近づいたかと思うと、またどんどん向こうの方向へと遠さかってしまうといったことの繰り返しです。

同窓会の皆様、何かご意見等ありましたら、下記のメールアドレスまでご遠慮なくご連絡下さい。

E-mail:ritz-cs@mail.netwave.or.jp

玄関前でスタッフと

ブティック紹介記事の縁

南部徳洲会病院
町井　康雄
（昭和63年卒）

平成11年春より南部徳洲会病院に勤務し、療養型病床群・デイケアを担当し、現在に至っております。同病院は沖縄本島南部の東風平町に位置し、昭和54年開院で、300床（一般）です。周囲には、今では自動車道、バイパスが走り、那覇市から南風原町に続く市街地が目前に迫っております。

個人的な出来事では、大変遅れ馳せながら昨年秋に結婚致しました。経過概略は下記です。

平成７年夏、雑誌「ラセーヌ」（第10巻、第８号、1995）に、ベトナムシルクの店「ホンニュン」（英語名Rose Boutique）143 Dong Khoi St., 1st District, Ho Chi Minh City, Vietnamについての紹介記事が掲載されました。昔堅気な仕事ぶりをうかがわせる紹介文に私は興味を持ちました。平成８年１月２日私はホンニュン宛てに問い合わせのエアメールを送りました。文面は、独学のベトナム語で書きました。同月10日付けで、ホンニュン店主 ズン ティイェン夫人は、私宛に案内のエアメール（ベトナム文）を発送しました。冒頭近くに、「苦心してベトナム語を学んでくれて、深く感服する」旨の挨拶が述べられていました。

平成８年２月13日、ベトナムからエアメールが届きました。消印は１月31日付けになっていました。差出人の名はTran Thi My Loan（以下、Loan）と書かれており、店主とは別人の女性名でした。文面はベトナム文で、控えめな筆致で「ペンフレンドになりたい」旨のことが書いてあり、私は好感を持ち、返事を書きました。こうしてベトナム文による文通が開始されました。文通を重ねる内に、Loanが私より二回り近くも若い勤労学生で、ホンニュンで働いていたことが解かりました。
平成13年11月25日、ホーチミン市内にて初の面会が実現し、彼女の自宅に案内されて両親及び近在の兄弟に紹介されました。当日撮影したLoan及びその家族の写真は、帰国後に紹介文を添えて、栃木の実家宛て郵送しました。

平成14年２月、Loan～私間の文通での二人称が丁寧語から親称に移行し、翌月の文面には結婚を希望する旨の記述が現れました。同年６月、私はインターネットにより、ベトナム人と日本人とが国際結婚するための具体的方法の検索を始めました。Loanもホーチミン市内にて各方面への問い合わせを始めました。

事前に長期休暇の許可を得た私は、平成14年９月27日～10月12日、ホーチミン市に渡航、滞在し、Loan及び彼女が手配した弁護士と共に行動し、国際結婚手続きを進めました。
同年10月27日、病気（癌）療養中であった父町井儀男は、病室にLoanの写真を置いてLoan、私両人の結婚を待っておりましたが、この日眠るように世を去りました。享年75歳。
平成14年11月19日、ホーチミン市人民委員会にて、Loan、康雄両人の婚姻が成立し、即日　結婚証明書の抄本が交付されました。それを自分で和訳し、日本から持参した証明書等を添え、11月21日、私は在ホーチミン日本国総領事館にて婚姻届を提出しました。

新居浜　－住友別子病院、太鼓祭り－

住友別子病院
白川　淳子
（平成元年卒）

私が香川医大を離れて、愛媛県新居浜市の住友別子病院に病理医として赴任したのが平成７年４月、もう丸７年経ちました。私の近況と言っても特に変わったこともありませんので、新居浜について紹介します。

新居浜市は住友の町です。新居浜市の南の山にある別子銅山が大阪の商家、住友の財をなしました。別子銅山は元禄４年（1691年）に開かれ、昭和48年（1973年）まで283年間続いた日本有数の銅山でした。新居浜市にば“４社”といわれる住友金属鉱山、住友化学、住友重機、住友電業があり、これらを中核として多数の関連企業、子会社などが存在します。

私が勤めている住友別子病院は明治16年、別子山村において住友家事業の従事者とその家族の診療を目的として開設されました。今年は創立120周年にあたります。しかし、その前身はさらに古く、江戸時代にさかのぼります。昭和41年、数次の変遷を経たのち現在地へ移転、一般社会保険診療の取り扱いを開始しました。病院の運営は上記の“４社”と病院の“５社”によって決められます。

次に新居浜と言えば、太鼓祭りです。太鼓台は、もともと豊年の秋を感謝して氏神に奉納していたものでした。その起源は、平安時代、あるいは鎌倉時代までさかのぼると言われています。明治中期頃から、別子銅山の開坑による産業の発展に伴い、地域経済が発達するにつれて、太鼓台は急速に巨大化し、太鼓台の飾りが豪華になりました。大きさも巨大化するということは、その建設費用や、巨大な太鼓台を担ぐためのかき夫の力が多く必要になります。新居浜太鼓台が数多くの改良を重ねて現在に至っているということは、太鼓台が地域の「財力」と「腕力」の二方向から発展したと言えるようです。現在、太鼓台の規模は長さ11m、高さ5.4m、重さ2.5ｔ、幅3.4mで、かき夫150人、指揮者４人、重乗り４人、太鼓叩き２人です。費用は３千万円程度かかるそうです。新調するとなると１戸当たりの負担は数十万円から百万円程度に及びます。現金一括で払えない家はローンが用意されているそうです!?

毎年10月16日～18日の３日間、この太鼓台が47台、市中を練り歩きます。そして、150人余りの男衆で差し上げられ、澄んだ秋空に舞う新居浜太鼓台の姿は、豪華絢爛、勇壮華麗で、毎年約35万人の観衆を集めています。

ただ、ここの太鼓台は喧嘩太鼓です。因縁のある太鼓同士が出会うと鉢合わせといって太鼓台のぶつけ合いがおこります。巨大な太鼓台がぶつかり合うのですから、重傷者続出で、2､3年に１度は死者が出ます。ですから、要注意の太鼓台の後を愛媛県警機動隊が30人程度の隊で付いて歩いています。でも、大きな太鼓台が走り出すと止めることはできません。太鼓台が鉢合わせそうになると、観客は興奮し押し寄せます。私もこの興奮が大好きで、事前に鉢合わせがあるらしいという噂のある場所に行ったり、何か起こらないかなあと太鼓台の後をついて回ったりします。（大抵の会社と学校は祭りの３日間休みです。祭りの最終日は病院も休みです。）

皆さんも是非１度、見物にいらっしゃってください。ただ鉢合わせに近づきすぎて、巻き込まれませんように。犠牲者は新居浜出身以外の人だそうですから。

―「がむしゃら」と「ええかげん」―

日本医科大学　千葉北総病院
原　　義明
（平成４年卒）

「それじゃ、おつかれさん。またな。」国家試験後、同級生や後輩とこれといった挨拶もせず、そのときはまたすぐ会えるような気持ちで香川を発って、はや11年の歳月が過ぎました。同じ医学界にいるものの、なかなか会う機会はないものですね。皆さんお元気でしょうか？香川県も学会で一度だけ立ち寄っただけで、遠い故郷となってしまいました。

私は大学卒業後、東京にある日本医科大学救急医学教室に入局しました。挨拶に行ったその日から月平均27～29日の当直が数ヶ月続き、荷解きもしないまま秋になってしまったことが昨日のことのように懐かしく思い出されます。あの頃は何も出来ないくせに「自分が地域の救急医療を支えている」くらいの使命感を持って「がむしゃら」にがんばっていました。当然、体力的限界と精神的限界がやってきて、専門性重視の医療現場での救急医療の中途半端な位置づけに挫折し、他科への転科を考えるなど、一時は抜け殻のようになってしまいました。

長期研修に整形外科学を学び、整形外科医の立場から改めて救急医療を見てみると、驚くほど未開拓分野がいっぱいでした。整形外科医にならず救急医として留まった一番の理由は、全身管理の出来る整形外科医の少なさと整形外科的知識のない救急医の多さに愕然としたからでした。整形外科では何ということもない簡単な整復固定術なども「全身状態の不良」という免罪符によって放置され、重篤な機能障害を残したまま、甘んじて受け入れている患者さんを診る機会が少なからずあったのです。

現在私は千葉県印旛村という、おそらく日本で唯一の村にある救命救急センターで働いています。ここにはドクターヘリなどもあって連日のように重症患者が運ばれてきます。体力的にはきついですがプレホスピタルケアも経験できて勉強にもなり、地域医療の一助になればと思い日夜奮闘している毎日です。近頃の私は研修医の頃の「がむしゃら」は影を潜め、「ええかげん」な治療をモットーにしています。もちろん手を抜くという意味ではなく、ちょうどいい「いい加減」に治療をするということです。これが患者さんにとっても、また救急医を長くやっていく上でも大切なことだと思っていますが、結構難しいものです。

仕事以外では、６、７年前から北海道に魅せられており、長期休暇時には必ず自転車にテントを積んで走り回っています。今度は機会を作って四国一周でもしようかなと考えているところです。最近、関東では「讃岐うどん」ブームとなっており、うどん屋も数多くなってきました。看板を見るとつい入ってしまいますが、真っ黒いスー

プに入ったうどんを食べた後「こんなん讃岐うどんとちゃうわ！」とひとりで憤慨しながら、また看板を見ては暖簾をくぐってしまう日々です。全国各地で御活躍の卒業生の皆さん、これからも「ええかげん」にがんばってくださいね。PS「ふみや」のお好み焼きも食べたいなあ。（連絡先：hara-nms@umin.ac.jp）

近　況　報　告

国立医薬品食品衛生研究所 医薬品医療機器審査センター
横井　英人
（平成８年卒）

私は平成８年卒業後、千葉大学医学部附属病院の医療情報部に入局しました。同部は日本の電子カルテの開祖の一人と呼ばれる里村教授が率いる医療情報の研究室です。私は香川医科大学在学中から、耳鼻咽喉科教授と医療情報部部長を兼任されていた酒井俊一先生、医療管理学を担当されていた石川澄先生にご指導いただき、将来的にも医療情報を志そうと考えておりました。そして最終学年時、石川先生にご紹介いただき、里村教室の門をたたくに至りました。

三人の先生に一致した見解は、「臨床に関して充分な力をつけておけ。」ということでした。医療情報はコンピュータと向き合う作業が多いので、だんだんとコンピュータ中心の考えに凝り固まってしまう可能性があります。その前に臨床の感覚をしっかり身に染み込ませておくようにという戒めだったのだと思います。私は千葉大学第一内科に籍を置き、大学の内外で４年間消化器を中心とした内科の研修を受け、平成12年４月、医療情報部に医員として帰局し、同時に医療情報学講座大学院生として、実務と研究がスタートしました。

医療情報という分野を専門にしている医師はあまり多くなく、また学問として充分に体系立っていない部分もあります。しかし、医療のＩＴ化は他業種に比べ遅れており、その効率化・サービスの質の向上のためには医療情報分野の担う責任は大きいと思っております。

とはいえ電子カルテは、まだ「こなれ」てはおらず、導入コストに見合った利益を得ている機関ばかりではないと思います。安全性・真正性の確保など検討課題も残っております。これから更にシステムに磨きをかけて、より普遍的に通用する運用形態を目指さなければなりません。

現在、私は音声入力・手書き（ペンタブレット）入力などといったマルチメディア的な入力方法について、その実用性について検証しております。また、医療情報システムに蓄積された膨大なデータからどのようにして法則性を見つけ出すかといったＥＢＭにつながるような二次利用の方法論についても研究しております。どの分野もまだあまり多くの人に踏み荒らされていない分野であり、楽しくやりがいがあります。また、このような分野におりますと、学外の診療所や病院の先生から電子カルテの導入方法やＩＴ化に関する相談を受けたりすることも多く、直接的に医療現場のＩＴ化に貢献できる機会を与えられ、これはこれでプラクティカルなやりがいがあります。

まだまだ研究を突き進めきっていない状

態でありますが、本年６月から厚労省の外郭団体の医薬品医療機器審査センターに異動となります。しばらくは医薬品の許認可という、方向の違う業務につきますが、今までの経験を役立てながら、更に新しい経験ができればと思っております。今後とも皆様のご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。また、もし医療情報についてご興味をお持ちの方がおられましたら、どうぞ遠慮なくご連絡下さい。

メール：yokoih@telemed.ho.chiba-u.ac.jp

（平成15年度の間、有効）

～野口英世の生涯と私の目指すもの～

福岡記念病院
大谷　真子（旧　吉田）
（平成８年卒）

縁あって現在福岡の中規模病院の内科に勤務しています。昨年夏、宮城、山形、福島へ旅行に行きました。その時猪苗代湖の近くを通った折、野口英世の生家に立ち寄りました。野口英世博士といえば最近お札の肖像に選ばれたとかで、脚光を浴びていますが、私たちの大先輩であります。そんな訳で博士の生涯について少し触れてみたいと思います

皆さんご存知のように1876年に博士は貧しい農家に生まれ１歳半のとき囲炉裏に落ちて左手にやけどを負いました。ハンデを負いながらそれをバネに小学校で優秀な成績を修め、高等小学校では級友たちの募金で左手の手術を受けることができました。そのときの医師との出会いが博士の生涯を決定付けることになりました。20歳で医師の資格を手にし、1900年24歳のとき博士は渡米し、蛇毒の研究を行い、熱心な研究者として認められました。1915年にいったん帰国しますが再度渡米し、当時、南米大陸で猛威を振るっていた黄熱病の研究のため、自分の危険も顧みず1918年に発生の中心地エクアドルへ赴きます。入国後９日目にして病原体の発見に成功され、血清とワクチンを作り、それまでの死亡率50～90％を18％にまで減らしたのです。偶然ですが一昨年の夏、ガラパゴス諸島へ旅したのでグアヤキルに行く機会があり、そこでバスで市内観光をしたのですが、市場の近くの寂しい通りを通ったとき、ガイドさんが「ここはノグチストリートといいます。野口英世博士がエクアドルのために尽くされたのを記念して名付けられました」と説明しました。ほかにエクアドルは博士の名前のついた小学校もあるとのことでした。日本の裏側の国で野口英世は救世主のように尊敬され、親しまれているのです。現在、博士を顕彰・記念するものは、アメリカ、日本、タイ、ドイツ、メキシコ、ブラジル、ペルー、ガーナなど世界各地で、博士を記念した医学研究所、病院を始め、学校、公園、像などがあります。世界中には、130ヵ所にも上る地に、像が設置されているそうです。その後も休むことなく博士は伝染病で困っている世界の人のために尽くしましたが、ついに自分もアフリカのアクラで黄熱病に罹患してしまい、51歳で亡くなりました。私は51歳まであと18年しかありません。私は研究者ではなく臨床の場にいますが、自分のスタイルというものが確立できていません。内科という科は範囲が広く患者さんもいろいろな人がいます。様々な問題にあたっては途方に暮れる日々です。今回博士の生涯と業績に触れ、早く自分なりのスタ

博士の落ちた囲炉裏

イルを作り、世の中のために真に貢献できるようになりたいと思いました。

博士の生家は自然豊かな猪苗代湖のすぐ近くに保存され、今は野口英世記念館のなかに静かにたたずんでいます。小さな萱葺きの家、博士の落ちた囲炉裏や、医者になるべく上京する際、「志を得ざれば再び此地を踏まず」と野口青年によって刻まれた柱が当時のままに残されています。皆様も福島へお寄りの際は一度足を運ばれてはいかがでしょうか。

博士と一緒に

日本三景を眺めて３年

福知山市民病院
稲葉　純子（旧　坂東）
（平成10年卒）

日本三景のひとつ、天橋立をご存知でしょうか。京都府の北、日本海に松並木の一本道。青葉の季節も雪の季節も感嘆させられます。この風景を毎日眺めた３年間のご報告です。

私は平成10年に香川医科大学を卒業後、京都府立医科大学の眼科学教室へ入局しました。他大学出身者としての差別も女性扱い（？）もされず、学会報告は数多くさせていただいて、２年間の研修は充実したものでした。しかし田舎育ちの私は都会暮らしにくたびれ、脱・都会願望が強くなっていました。そんなとき京都府与謝郡岩滝町にある府立与謝の海病院（230床）勤務の辞令がおりました。天橋立と温泉とカニの町にある、医療僻地のための病院です。コンビニはないけれども雪は多いところで医局員からは敬遠されがちな遠方の関連病院でしたが、私は京都市内を脱出できると大喜びで平成12年４月に赴任しました。

この病院の眼科医は３人で医長は奇しくも４期生の澤浩先生（医局内唯一の同窓生）でした。澤先生には白内障手術や眼科の臨床技術について一から教えていただき、さらには穴場の温泉や刺身のおいしい店まで伝授いただき大変お世話になりました。患者さんたちはのんびりと温かでした。当地の方言で、みなさん「しんきい」と訴えてこられます。見えにくい、痒い、ごろごろする、眼脂が出る、すべて「しんきい」と表現する患者さんに、ゆっくりと話を聞いていきます。患者さんがのんびりしすぎているせいか、都会ではあまりみられない重症の外傷や感染症、ぶどう膜炎を数多く経験することが出来ました。ときにイチゴや松茸、アワビやイカをいただいたり、妙に気に入られた患者さんには開業用地を1000坪あげますと申し出られ慌てて辞退したりという毎日でした。

私は週末に都会に遊びに行くこともあまりせず、地元のバスケットボールチームに入って丹後半島リーグに参加したり、雪深い日に大きなジャンバーと長靴で雪かきしたりと、３年間ですっぽりと地域にとけこんでしまいました。ついには隣の病院の内科医と結婚し、住民票までも移してしまったのでした。

こんな風に楽しい田舎生活でしたが、困ったのはうどんが食べられないことでした。外来に疲れはて、あー、こんな日は山田屋のうどんだよなあと思っても、叶いません。カトキチの冷凍うどんを食べて我慢し、たまの香川来訪の折には山田屋や久米池へ足を運んで家族に笑われています。

今春、３年間を勤めたこの天橋立の見える病院を離れ、若干南の福知山市民病院（300床）へ移りました。眼科医は２名です。福知山もやはりちいさな町ですがローソン

日本三景のひとつ、天橋立（京都府）

はありました。この病院は（なぜか）設備が非常に充実しており、ここで腕を磨くのもいいかなと思っています。というふうに田舎暮らしはまだまだ続きそうです。当分都会での勤務は勘弁してほしいと思いながら日々臨床に励んでいます。同窓会や学会の折には都会の風を感じさせてくださいませ。乱文失礼致しました。

平成10年与謝の海病院眼科スタッフ
（中央が４期生澤浩先生、後列右端が筆者）

仕事と責任と
卒後５年を終えて

湘南鎌倉総合病院
滝　　正徳
（平成10年卒）

神奈川県の社団法人愛心会湘南鎌倉総合病院で整形外科医として勤務しています。徳島県の農家出身で、神奈川に何か地盤があったわけではないのですが、同病院にいたクラブの先輩の岩田修先生（昭和63年卒）の“来てみたらぁ？”の言葉に一念発起して四国を出て５年が経ちました。同病院は湘南・鎌倉地区の中心的病院で年間6700件の救急車、一日2000人の外来患者、夜中までERは人であふれているという野戦病院的な一面から、世界的にも活躍している先生方も多く、最新鋭の治療という面で華麗な一面を合わせ持つ病院です。

当科も同様でいろいろな経歴を持った常勤８人で基本構成され（今年平成13年卒の明田真樹先生が加入・前出の岩田先生は現在オープンシステムで開業、手術は当院でしています）、開放骨折や大腿骨頚部骨折から体外衝撃波治療やロボドック手術までを手がけています。また“他流試合をいっぱいするように！”との部長の考えの基、院外研修が奨励されており私も当院だけでは得られないエッセンスを駿河台日本大学病院や昭和大学藤が丘リハビリテーション病院で頂いています。

医者になって五年を終え、今思うのは、人と人とのつながりの大切さと仕事の責任の重さです。若輩の私がスポーツ外来を担当できたり、年間約250件の手術を術者として担当できたりすることは同僚や先輩方、他院の先生方のサポートなしでは成り立たないことですし、（願わずとも）私の患者となって下さった方々のサポートがあってのことと思います。また医療を取り巻く厳しい社会環境の中、患者さんの未来を受け持ち、周囲の期待を裏切らないよう診察した

湘南鎌倉総合病院　香川医大グループ
前列左から林修司（H15卒），岡村暢大（H14卒），後列左から明田真樹（H13卒），著者，岩田修（S63卒）

り手術したりするという責任には、困難さを通り越した医師の仕事の怖ささえ感じています。

普段の仕事で学閥を気にすることはまずないのですが、履歴書等自己紹介時には“国立香川医科大学卒業”を名乗ります。私は卒業後すぐに大学を離れた者ですが、特に香川医大出身者が少ない関東では“私で香川医大が変に評価されないようにしないと！”と気をつけています。今後自分の世界を広げる上で“香川医大出身”をいろいろな場で名乗ることとなると思いますが香川医科大学と讃樹會同門の名を傷つけないよう精進したいと思います。

最後に、このような機会を与えて頂いた髙橋先生・清元先生はじめ讃樹會事務局の方々に感謝致します。

事務局からのお知らせ

１．次号からは名簿・会報の送付は会費納入者に限らさせていただきます。
会費が未納の方は、急ぎ納入してください。

任意団体である同窓会にとっては会費の納入が唯一無二の活動資金である点につきましては、会員のみなさまも充分ご理解いただいていることと存じます。今後とも年を追って規模が大きくなる同窓会会員同志のネットワークの維持に不可欠な名簿や会報といった情報誌の発行・送付、ホームページの管理等にかかる費用は、全てみなさんの会費納入によってのみ、まかなわれています。つきましては、納入いただいている会員の方にのみ発送させていただくという形をとることで、未納の方にも納入の必要性を感じ取っていただきたく、讃樹會会則会費規定第６条「５年間会費未納者には会報並びに名簿等の送付を猶予する。」に基づき、次号より、発行時において過去５年間をさかのぼり、会費を一度でも納めていただいた方にのみ名簿・会報を送付させていただきます。

２．讃樹會ホームページアドレスのお知らせ

http//www.sanjukai.jp

讃樹會のホームページアドレスをお知らせします。４月から新しいデザインのトップページで公開されています。
《同窓会報バックナンバー、総会･理事会の議事録、異動連絡票》は、会員専用ページとさせていただいています。ご利用の際にはユーザーＩＤ及びパスワードが必要となります。尚、ユーザーＩＤ及びパスワードは年会費を納入いただいている会員に限り、お知らせ申し上げます。

３．個人データをチェックし、変更箇所をお知らせください。

毎年１回、年始めに名簿の発行を予定しています。同封の個人データの記載内容をご確認のうえ、変更箇所、空白箇所、名簿記載不可をご希望の箇所等、お知らせいただきますようお願いします。尚、返信の締切りは**12月20日**とさせていただきます。ご返信がない場合は前回同様とさせていただきます。

４．悪質な名簿業者からの問合せに注意してください。

業者が同窓会や、学内の医師名を騙って、勤務先に電話をかけ、現住所や自宅電話番号を聞きだそうとすることがあります。同窓会事務局から問い合わせることが全くないとは言い切れませんが、不信な問合せの場合、お手数ですが、同窓会事務局に電話をかけなおしていただくか、メールでお問合せいただきますようお願いします。

編　集　後　記

率直に、今の香川医大は非常に混迷しています。学長選挙、学部長選挙、病院長選挙が立て続けにあり、10月には香川大学との統合がとり行われます。来年４月からは、新医師臨床研修が開始され、制度改革の中で右往左往している状況のように見えます。この中で同窓会活動について、先日理事会で多くの意見が理事から出されました。私の私信かも知れませんが、同窓会はどういう組織であるべきかという原点に返るべきであろうと思うのです。名簿を作ってこのような会報を発行して、意味があるのかと言われれば、考えてしまいます。会費納入がない人には次から送ることもなくなりますし、今回が会誌を送る最後になるかもしれません。会誌を編集するだけ、と言っても私の能力にも限界があり、最近の仕事の多さから、このような文章を書くことすら困難になってきました。

どうせ変わることが出来ないなら、変わる必要もなく、このまま自然に消滅する。それも、香川医大気質ということでいいのかもしれません。昔読んだ本に、Serendipityという話がありました。元々は、Serendipityはセイロン気質という意味です。何も決定できないセイロン（現スリランカ）の三王子様の話です。無難に、波風を立てず、適当に。そういう意味です。でも、結果的には待つことだけで、無難な人生を送り幸運を手にする。正論を述べ、対立することで淘汰されてしまうことを嫌う。母国セイロンでは正論よりもSerendipityを美徳としました。

先日の理事会に出席して、色々な意見を戦わせてこそ同窓会だと思ってきましたが、そういうやり方はむしろやめた方がいいのではないかと思ってきました。結局、無駄な会議は止めて、名簿の編纂も止めて、会誌も止めて、同窓会を解散する。そういう意見もセイロン的ではありますが正論かもしれません。早いものでもう２年経ちました。本会誌にもあるように、次期会長選挙の告示があります。我こそはと思われる方、同窓会を変えようと思われる方、是非とも立候補して下さい。

さて、今回の会誌では懐かしい顔ぶれが寄稿してくれました。地元に根ざして精進する先生方、留学して新領域を開拓される方、本当に多種多様な人間を育成してきた香川医大が統合を契機に幕を引こうとしています。その中で特集記事に喜んで寄稿していただいた徳田先生の教育にかける情熱は、何者にも代えることの出来ないことをされていると感銘いたしました。徳田先生の大局に立って努力されている姿を鑑みますと、自らの自堕落な生活ぶりが嫌になってきました。同窓会誌が会員皆様の少しでもお役に立てればと思いつつ、皆様の益々のご発展を期待して筆を置きます。

PS；前略、滝先生。あなたが学生時代、徳島の実家にあるイチゴのハウス栽培に僕の家族を招待して頂き、子供たちに死ぬほどイチゴを食べさせてくれてありがとう。時の経つのは早いもので、あの時の子供たちも大きくなり、立派な空手家を目指して小学校に行っています。でもそれ以上に、滝先生が立派になられてとても嬉しかった。この編集の仕事をしていて良かったなぁ、と思いました。今後の更なる飛躍を期待しています。

編集委員長　清元　秀泰

香川医科大学同窓会讃樹會行き
（FAX：087 - 840 - 2291）

異　動　連　絡　票

該当するものに○をお付けください			卒業年 S/H　　年（第　　期）		
			開業医／産業医／勤務医／研修医 その他（　　）		
ふりがな				所属等（卒業時の入局先）	
氏　名 （旧姓・旧名）	（　　）				
現住所	〒				
	TEL		FAX		
勤務先	名称			部署	
				役職	
	〒				
	TEL		FAX		
電子メール アドレス					
恒久的住所 （実家等連絡先）	〒 （氏名・続柄　　）				
	TEL		FAX		
連絡事項及びメッセージ					

お願い
名簿発刊時に記載不許可の項目は○で囲んで下さい。

※　印は記載しないで下さい。
※　連絡日　　年　　月　　日
※　処理日　　年　　月　　日